

体験的自分史論 筑井信明

目次

- I 自分史との出会い 2
- II 自分史は文学なのか 5
- III 歴史としての自分史——戦争体験を中心に 16
- IV 過ぎゆく時間の中で——最後の「戦争体験」 29
- V さまざまな自分史① 自分史の典型 42
- VI さまざまな自分史② 技術者の自分史 52
- VII さまざまな自分史③ 女性の自分史 56
- VIII さまざまな自分史④ 親と子の自分史 62
- IX 自分史は「究極の楽しみ」か 68
- X 自分史の行方——新しい「闘いと再生」の記録 73

I 自分史との出会い

しばらく前から個人の出版活動を請け負うことを仕事のひとつにしている。いわゆる「自費出版」というものだ。最近の編集組版や出版印刷技術はパソコンが主体なので、私がこれまで習得してきた知識や経営方法の延長線上にあることもあったし、五十歳を越えた頃から、これからはやりたいことだけを仕事にしたいという気持ちが強くなってきたこともある。もちろん、実際のビジネスとなると「やりたいこと」と「その仕事の適性・才能があること」はまったく別だから悪戦苦闘の日々が続いてしまうのだが、それでも最近ほぼ休止の状態になるまで、八年間余の間に百点以上の自費出版の仕事をした。個性豊かな著者の方々との出会いも楽しい体験だったが、出版される本の中身が驚くほど種類豊かで、歴史、経済、芸術、科学などの研究書から旅行記、マンガ、詩集、小説、翻訳まで、ありとあらゆる精神世界の現象が個人の関心の対象になっていることがわかったこと。これは思いがけない経験だった。

その分野のひとつに、これは個人出版の特徴のひとつであるけれども、自分の生活や経験をそのまま素材にしたエッセイや記録（ノンフィクション）がある。文学作品（小説）の多くに、個人の体験に基づく自伝的要素があるのは当然のことだが、ここでいう意味は、そういうテーマの発芽材料としての自分の体験ではない。その人たちの記録には、もともと直接に、自分の体験した詳細な生活の実体が綴ってあるのである。いわゆる「自分史」といわれる作品で、はつきりと自分の人生の記録を残したいという意識的な構成のもとで書かれたものもいくつもあった。小説の形態をとっているが、明らかに自分史だと思われるものもあった。

自分で出版の仕事をするまで自分史というものを知らなかったわけではない。十数年ほど前に自費出版の存在意義を高めようということで、自費出版書籍紹介のホームページをつくった時にも、こうした種類の書籍がたくさんある

ことはわかっていた。さらに、私は自費出版ネットワークというNPO組織に参加しているのだが、この団体が、発足の翌年（一九九七年）にはじめて自費出版文化賞という、優れた自費出版物を顕彰しようという事業の最終選考委員長になっていただいているのは、あとで述べるように、自分史の名付け親である歴史家の色川大吉氏である。当然、この日本自費出版文化賞には、自分史を含む「個人史」という部門が設けられ、第一回からかなり多くの応募が集まっていた。

そんなこともあって、実際の「自分史」はかなり目にしてきたし、毎年の自費出版文化賞の選考会でも多少は読む機会があった。しかし、自分で、自分史の著者に会い、話を聞き、文章をまとめる過程に触れたのは、自分が仕事として自費出版を行ってからのことになり、これは完成された記録を読むのとはまた違う体験だった。そして、そうした自分史を読んでいくうちに、私の中にいくつかの思いが浮かんできた。

自分史をごく単純に考えようとすれば「ある個人の人生の記録」だろう。自分史はそういう意味で大変わかりやすく、そのテーマの選定、あるいはなぜ自分史を書いたのかという執筆の動機がまず明確である。そして、多分そのわかりやすさのために、現在も多くのひとが、しかも過去に文芸作品を書いたり発表したりしたことのないひとたちが、この自分史に関心をもっているという事実がある。いわゆるインテリ層が、この自分史に意外に関心を示さないのも面白い現象である。彼らは、自分の人生を明らかにすることに、ためらいや気恥ずかしさを感じるのだろうか。

つむじまがりの私は考える。とすると、これは「ひとはなぜ文章を書くのか」という永遠のテーマを解明するための重要な素材になるのではないだろうか。それにもうひとつ、やや大げさにいえば、それは「ひとはどのように生きるのか」を考えることにつながるのではないだろうか。私たちは歴史の中の小さな個人という存在であることを否定できないし、その狭い世界からみた現在は、常に混沌としているように見え、過去は記憶の中にぼんやり霞んでいるだけで、確固とした自分自身の存在意義をどこにも探し出せないでいる。その中で、一番よく知っている「自分の過去」という事実をもとにした記録は、それがどのようなものであれ、自己再生のための貴重な方法ではないだろうかということである。

これから、そんな自分史に関する個人的な考えを記していきたいと思っている。自分史に関しては、すでに多くのすぐれた研究や調査があることは知っているし、私の体験などとするに足らないものだと思うが、ここでは私の私的な経験の中で出合った人たちの記録や、多分に偶然に左右されて読んだ記録だけに頼っていくことにしたい。私の現在までの生活の、少なくともその一部は無駄でなかったことの証明にしたいからである。これがこの小論を「体験的自分史論」とした理由である。

II 自分史は文学なのか

自分史を考えるさいに必ず問題になることがある。それは、自分史は文学なのか歴史なのかという問題である。これは単に書誌学的な分類の問題ではなく、自分史の書き方、やその評価の仕方、さらには日本人の文化観にまで広がる大きなテーマになってくる。

文学（あるいは文芸）を「言語表現による芸術作品」と考えるならば、とりあえず自分史を「文学ジャンル」のひとつに考えるのに不都合はない。それでも「ただし書き」をつけなければならぬだろう。はっきりいえば、文学としてまともに論じられたこともなく、評価どころか、その中のどこに位置づけていいのかさえ、はっきりしていないのではないか。

自分のことを詳細に語る文学の伝統やその作品は昔からあった。田山花袋まで遡らなくても昭和初期の嘉村礒多から現代の柳美里まで、いわゆる私小説に代表されるように、近代文学は実在者とおぼしき個人の生活と、社会、世間の間に生まれる確執をひとつの大きなテーマにしている。また伝記あるいは自伝という特殊なジャンルも存在していた。

しかし、あとで述べるように、現在の自分史は、これらとは少し違う誕生と生成の履歴をたどってきた。つまり特殊な歴史記録として生まれてきたのである。そして、起源をたどれば、どんな歴史記録も叙事詩につながり、発生は文学なのだから、すべての歴史記述は、例えばそれが研究論文であろうと、文学であるといってもよい。まして、大衆向けに書かれた啓蒙的な歴史書は、ある種の歴史小説と同様の通俗生をもっている。歴史が言葉で書かれ、言葉が、どんなに素朴にふるまっても、比喻とレトリックによつてしかその効果を十分に発揮できないものであるかぎり、それはそういうものなのである。これは名文家によつて書かれた科学の啓蒙書にもいえることだ。科学は文学ではないが、科学の記述は文学であると思う。

まして、自分史はときに小説のように書かれる。小説そのもの場合さえある。そんなことからだろうか、一部には少し強引に「自分史文学」なる言葉を用いることもあるようだ。この場合は、おそらく「自分史」をテーマにした文学（文芸）という意味にしか考えようがなく、喩えてみれば、SF文学や歴史小説、推理小説などおなじ意味あいでは使われるのではないだろうか。そのほうがすつきりする。この場合にも大事なものはもちろん、自分をテーマにしたことではなく、「自分の歴史」をテーマにしたということである。現在、この「自分史文学」を標榜して、作品まで公募しているものとしては、北九州市の主催する「自分史文学賞」がある。

ちなみにこの「北九州市自分史文学賞」の応募要項をみると、自分史とは「体験を中心に自らのあり方を綴ったもの」となっており、自分あるいは自分の身近な人間の歴史を記述するというところに制約をおいている。「体験を中心に」ということは当然「フィクションでないこと」を意味しているのだろう。ように、自分史はこれを文学（文芸）とみれば、「テーマを個人の人生の記録とした文学作品」だということになる。これが、純粹の小説と、どこが違うのだろうか。

「行ってきます」

元氣よく金田町の家を飛び出した私は。いつもどおり西小倉小学校に向かった。日豊本線の線路沿いの道を小倉駅方面に三〜四分ほど歩くと、菜園場方面からの児童たちが左側の国鉄踏切をわたって合流し、通学路はがぜん賑やかになる。

これは先ほどの北九州市自分史文学賞の第一七回受賞作品『大坂町筋鳥町通り』（二〇〇七年、学研）の冒頭である。作者は須嘉恵氏で、昭和三十年代の自らの少年時代と、離婚した父母への複雑な思いを、北九州の小倉というひとつの街とそとの生活に集約させて描いた作品だ。ここは、主人公が父と母の別れを知らされ、引越していく当日の描写のだが、いうまでもなく、これは小説的な技巧である。記録としてみれば、実際にどのような会話をし、どうように歩いたかなど正確に検証できるものではないから、厳密なノンフィクションの世界では普通やらないことである。しかし、多くの小説的な自分史では、こうした描き方はかなり頻繁に使われる。

そして、少なくともこの自分史文学賞では認められるようで、選考委員の佐木隆三氏は巻末の講評の中で、直接この作品に対してではないが「自分史であっても、構成上のフィクションは許容される。そうであれば本当らしくする工夫が必要」と述べている。そうなると、自分史と純粹の小説の区分は限りなく小さいということになる。佐木氏は同じ講評で、続けて「『私小説』が、一〇〇%『事実』だとは誰も信じていない」とも述べているから、多分そう思っているのだろう。

この『大坂町筋鳥町通り』では記録的な手法も使われており、実際にはこのほうがずっと多い。例えば次の記述である。

この駅移転までは、千日通りはとても賑やかな通りだった。昭和三十一年、歳末には千日通りと対岸にある船頭町の楽天地とを飲みまわる酔っぱらい対策のため、臨時交番を設けなければならなかったぐらいだから、その繁盛ぶりが想像できる。

小倉駅の移転に伴う母の店の衰退を描く場面の背景説明になるが、むろん、これとて小説の一部としてみられないことはない。次も同じような説明内容なのだが、会話が出てくるので、純然たる記録的記述とはいえなくなる。

母と暮っていた西曲輪の室町は細川藩時代には諸町と称していたが、小笠原藩時代に室町になったという。下関への渡航の待合場所として、小倉城下町中最も賑わいを見せた町で大きな町家が連なっていたらしいが、私の時代には残念ながらその面影はもう殆どなく、町の賑わいの中心は東曲輪の魚町周辺に移っていた。

母は魚町辺りを決して魚町と言わなかった。何故か大坂町と呼んでいた。これはこの店に同居するようになってすぐに気付いた疑問だった。

「大坂町に買い物に行こうか」

という母に私が、
「魚町でしょう」

と正しても、母は大坂町で通した。私は不思議で仕方がなかった。小倉の現在の町図を見ると、もう大坂町の町名は無くなっている

さらに、次のような記述になると、どうだろうか。

さて、三種の神器の一つである冷蔵庫に、話を移してみよう。

冷蔵庫の国産第一号は昭和二十八年に販売を始めている。昭和三十七年には全自動霜取り装置が付いた電気冷蔵庫が売り出され、家庭への普及が

五十パーセントを超えたのは昭和四十年だとあるから、テレビと比べると三年ほど遅れて普及したようだ。

純粋な小説であれば、その当時の生活の実感を出すための工夫だとしても、調べた数字をそのまま“生”で使うようなことはしない。これは小説技術上の問題なのだが、このように記録がそのまま提出されたような文章が続くと、小説的世界の流れと読者の感情移入は、そこでとぎれてしまう。もし、自分史が文学になるとするならば、先ほどの佐木隆三氏の言い方を借りれば、ここで「記録を記録として生で見せない工夫が必要」となるのかもしれない。

その工夫がうまくいった時には、今度は、その記録は、自分史をテーマにした「文学」ではあっても「自分史」とは呼ばれなくなるのかもしれない。それはそれでいいのだというのが「自分史文学」の立場だと思う。私もそう考える。

ここで紹介した須嘉さんの作品には、そこまでの割り切り方がない。ただ逆にそこが自分史らしさを出している箇所でもある。非難しているのではなく、自分史には記録としての側面があることをいいただけだ。評価が難しいところである。

もう一冊、別の自分史をみてみたい。

「私、出掛けてきます」

「どこへ行くのだ」

「ちよっと」

「ちよっとじゃ分からんよ」

「貸衣装屋さんです」

「何しに行くんだ」

「衣装を借りるんです」

「どういうことなのか、もっと分かるように詳しく話をしてみろ」

問い詰められて、はじめて草菜女史に命じられているいきさつを語った。信之は、複雑な表情をして、華子の話を聞いていた。

「私、留め袖を持っていないから……」と言って、華子が立ち上がり、表に出ようとすると、信之が近づいてきて、右の手を挙げて物も言わずに、いきなり華子の横っ面を殴りつけた。

「痛い！」

「留め袖がなくて、結婚式に出られないなら、行くな！」

「そんなことができますか」

「留め袖でなければいけないと、誰に言われたんだ」

「荒木先生にです」

「貧乏暮らしで、女房に留め袖を作ってやれないで悪かったな。おれは、お前の留め袖どころじゃない。子供だって、一人前にしてやれるのか、自信がないんだよ。そんな貧乏暮らしを、愚痴も言わずに、我慢してきたのは、あれは何だったんだ。おれの気持ちだが、少しでも分かるなら、つらい気持ちを、和らげるような心遣いはできないのか」

『妻恋記』（一九九九年）からの引用である。書名からもわかるように、亡くなった自分の妻との生活を中心に、著者の美澤雅夫さん本人と思える主人公の半生が描かれている。この部分は、長年暮らしてきた夫婦でさえ、相手の気持ちを分かり合えない時の感情の行き違いを、多分それに近い事実があったのだと思うが、意識的に、まさに小説を書くように描かれている。

他の部分もこうした小説的手法で書かれた場面が多い作品だが、自分史の流儀に忠実な部分もあり、「あとがき」では完全に自分史であることが明らかにされている。そのためかどうか、いわゆる小説的な、物語の展開や人物造形としては物足りなさや不完全さのあることが一読して明らかかな作品になっている。見てもらいたいのは、それでも、少なくとも部分的にその表現形式をとりあげてみれば、文学作品になっているように思えるということである。

最初の『大坂町筋鳥町通り』の例と併せて、ここまでで、私には、もし読んでいるひとの感情移入を妨げないように、小説的記述と自分史的（記録的）記述を巧みに描きわけける手腕さえあれば、自分史と文学（多くの場合は小説）の間を埋めることは十分に可能であるという結論が出せそうである。

しかし、それでは、そのようにうまく書かれた小説的自分史と、優れた文学作品との違いはどこにあるのか、という次の疑問が出てくる。

個人の内面を書くのが文学である。この中に、先ほどいったように日本の近代小説のひとつの流れであり、ときとして純文学の典型とも考えられてきた「私小説」というジャンルがある。「私小説」は基本として真実のみを書くことになっている。自分自身はもちろん、家族や親族、友人までときにより類推できる。まさにわかりやすくいえば、その形式は自分史そのものである。

戦後文学の中でいわゆるこのような「私小説」の典型とされている作品に島尾敏雄の「病妻もの」といわれる一連の小説、なかでも『死の棘』がある。

「さあ、そこをどいてちょうだい。今夜は本当に決心したんだから」「いったい、どこへ行くつもり」

「そんなこと、あなたには言えません」

「どこに行くかわからない人を出してやるわけには行かない」

「あのねえ、あたしはほんとうにもう、あなたを見るのもいやになったのですから、そこをはなして、いたいたいいたい！」

と痛がるので知らずに妻の腕を強くつかんでいた手をゆるめたが、彼女の全身にみなぎっている侮蔑の色は今までに見たことがない。それまでは妻が私に向いどんなに審き荒れていたにしても、夫への強い執着があり、それに反応していたのだと、うなずけたが、今夜はまるで様子がちがってしまった。気づくときは、いつも手おくれになっている。今朝までは、どれほど遅々としていても、傷は治癒の方に向っていたが、あとの半日の経過で、状態はひととびに悪化した。自分が誰かに向うと、なぜかぎこちない状態がうまれ、かかわりはもつれて疲労を与え絶望の方にひっぱって行く。妻にいぬちくしようと言われると、それに寸丈の合った自分ができ上るが、なお存在の値打がみとめられるとしたら、自殺をあせっている妻を思いとどまらせることだという思いこみ。そのことに妻が同意しなくてたとえ私が妻の前に理不尽に立ちふさがることになっても、それをする事が、自分の存在のただ一つの証明のように思えてくる。

私（主人公）は、他の女性との関係を妻に知られしまい、神経過敏になった妻が執拗にせめたててくるのを必死にこらえ、崩壊寸前の自分をささえている。その妻が出ていくというのを私はとめる。

同じく、夫が自らの浮気で相手を妊娠させてしまったことをわびる、次のような場面が、先ほどの『妻恋記』にもある。

「大変なことをしてしまった。許してくれ」

地にひれ伏すでもないが、畳に手をついて、こうべを垂れて、一部始終を告白した。

しばらくは沈黙で、顔を伏せていた華子が、やがて意を決したように信之を凝視した。

「宇佐見さんとは、どうするのですか？」

「どうって……。行き掛かりで生じたミステークだ」

「きっぱりと別れてくれますね」

「もちろんだ」

ふだんは権力をかざして、圧制に振る舞うが、こうして自分の犯した罪を披瀝して、素直に詫びているところは、まるで幼い子が悪戯をして、母の慈悲にすぎるような、叱りっぱなしにできない甘えがある。むしろ幼稚な可愛さを感じて憎めないことに華子は気付いた。

「すべて私に任せてくれますね」

「申しわけない」

信之には、どう処置するのかを確かめる、分別は無かった。無責任だが、妻に依存すれば何とかなるが、このまま東都製鋼に勤務して、淑子と顔を合わせるの、何としても避けねばならない。

当然ながら、実際の事実がどうだったのかはまったく関係ない。指摘したいのは、同じような深刻な事態におかれたときの、小説記述の奥にある作家としての視線の違いということだ。『死の棘』は読むものに、いい知れない不安を与える。気味の悪さといってもいいかもしれない。その不気味さは、かつて三島由紀夫が述べたように、どここの家庭生活でも起こりうる（あるいは起こっている）日常となんら変わることもなく、「その同一平面上の極限的なあらわれ」であるということにある。だから、そこに現実的な救いや、モノの分かった人間が現れてはいけなし、実際それはあらわれない。アンチ・リアリティの極限を追求した『夢の中の日常』を書いた島尾敏雄は、小説を作る人間として、それを誰よりも知っているはずである。

『死の棘』については、「文学的には後退し、敗北している」（「島尾敏雄の文学と夢」奥野健男）として、これを評価しない意見も根強い。しかし、これは文学観の相違ではないだろうか。私などは、この小説に「いい知れない不安」が感じられるとすれば、それだけで文学としての評価がされてよいと思っている。私小説と自分史の違いをはっきりさせるために、その正体をもう少し探ってみよう。

家庭が、現在、わたしたちの考えうるもつとも小さな共同社会であることとはいうまでもない。秩序の最小単位といいかえてもよい。わたしたち一人一人の人生と存在のもつとも日常的な様相が習慣的に展開される場所にほかならないが、そういう日常性と習慣性を破壊する「一触即発の危険」もまた、そこに宿されている。地雷のようにどこにかくされていて、いつ炸裂するかもしれないその危険の存在を、ふだんに意識生活の内部にかかえこんでいなくてはならないような状態が、人間としてはたして幸福かどうかは知らない。ただ、いいうることは、そのような状態のなかに身をおかざるをえぬとき、人は好むと好まざるとにかかわらず、おそらく自己自身のはりつめた「存在の感覚」を回復するであろう、ということだけである。

これは松原新一の「生は明瞭か」の一節で、この『死の棘』も納められている「全集・現代文学の発見」の解説として書かれたものである。彼によれば、人間には機能的側面と、その奥に隠された内的側面が必ずある。内的側面の存在感覚は、多分、人間関係の危機の中でしかあらわれることがない。そして、それは多くの私小説のなかでは「平穏にながれつつけていたはずの存在の日常

的、習慣的な様相の突然の崩壊」になつて表現される。人間の機能的側面とは「日常的、習慣的な様相」といつても同じことだろうが、それが崩壊することによつて、私小説は成り立っている。ここでは「存在の感覚」は確かにもたらされる。しかし、その代償として、日常的、習慣的な生活は破壊される。

『死の棘』においては、「私Ⅱ夫」の女性関係のことでノイローゼになつた妻の言動と精神の揺れ動きのなかで、家族の日常生活はいとも簡単に破壊される。つまり、妻、夫、子供という、家庭の中での日常的、習慣的存在はそれほど薄つぱらく希薄なものであつたことが、いやおうなく突きつけられる。そこに逃げ場はない。

これに対し、自分史としての『妻恋記』は、現実の話である。だから、理性的な妻の現実的な対応と周囲のおどろくほどの従順さで事態はあつけなく解決してしまふ。これも引用だが、浮気を知つた妻の（その時点としては）理性的な行動。それを夫である私は見守るだけだ。そこにも男女の複雑な心理が交錯していたことは確かだろうが、それは描かれない。

「それはできません。お腹の子は病院で処置し、お宅様に迷惑はおかけしません。私としてもつらい立場ですから、あとに引きずるのはご勘弁ください」

夫に対して全く従順で、自分の意見は出さない柔和な華子だが、信之の知らない強固な気性を秘めていた。慈母観音が天界から見守るような、そんな大きさを信之は感じた。

「若い前途のある身で、妻のある男と横道に逸れては、いつか泣くときがあります。病院には私が付き添いますから、もとの体になつて出直してください」

華子は、淑子を懇々と諭した。そして信之との縁を断つことを確約させた。

個人の苦悩や迷いは語られているが、その解決策は、必ず日常的、習慣的な生活の延長線上に見えてくる。その結果、いわゆる小市民的な平穏な生活を破壊するような事態が語られることは、けつしてない。それは読者に十分予想できることだから、読者は不安を感じることがない。

また、『妻恋記』のどちらの引用部分にも現れているが、作者の視点があまりなので、読者は物語に素直に入り込むことができない。一見するとこれは技術上の問題だと見られがちだが、小説における「視点」の問題も、自分史と

本物の私小説（本物の小説といったほうがいいだろうか）を考えるとときに欠かれない要素になることを示している。

『死の棘』で、作者は、家庭内の家族のささいな感情のもつれを連綿と執拗に描いている。しかし、読者には、その作品の「舞台裏」をみじんもうかがわせない。手練の手腕というべきだろうが、その手腕さえ見せてはいけない。『死の棘』では一人称や二人称（つまり、私や妻）を過剰に使っている箇所と必要最小限しか使っていない箇所がある。これは主語を省略できるという日本語の特性を最大限に生かして、この作品がはじめから私の精神世界に展開している悪夢、しかしそれは逃れようのない現実なのだということを、読者に納得させる効果を作り出している。それはまた用意周到な作者の、この作品に対する視点の確かさをもあらわしている、私にはみえる。読者をいやおうなく、逃れようのない現実⇨悪夢に立ち会わせてしまうことのできる作品を、優れた私小説というべきなのだろう。以下も『死の棘』より。

「あいつの方がもつときれいだとおっしゃりたいんですよ。ごめんなさいね。あなたの大事なひとをあんきたないひとに似ているなどと言って」

「………」

「でもどうみてもそっくりだわ」

とくちびるをふるわせている。外に出ると目にはいるひとの半分はどうしても女のひとであることを防ぐこともできないが、どの女も見たくない気持ちになり、ことにそばに妻が居れば、日に覆いをして置きたい。どの女からも女の要素が鋭利な放射線になって、敏感になっている私を刺しつらぬき、食あたりをしたあとの悪い気分におちこんでしまう。反対がわのプラットフォームを通りすぎる電車をみて、

「居た居たあいつが居た。こっちを見ていた。こわい」

と叫んで階段の方にいきなり走り出すこともある。

ここで、小説的技術のことをいっても仕方がないのだが、もし仮に、例えばそれが自分史であっても、その視点や記述に確かな足場をもち、物語記述の奥にある「舞台裏」を感じさせないだけの余裕と力量をもてば、十分に「文学作品」にはなりうると思う。あとは読むに値する作品か、そうでないかということになる。ここでまた、先ほど述べた、自分史と文学の間を埋める「自分史文学」は可能である、を繰り返すことになる。

しかし、自分史は、自分史であるかぎり、社会のなかでの個人の機能的側面

を描くことを目的としているのだから、自分自身の存在意義を破壊するようなことはしない。読者を、逃れようのない現実と悪夢に立ち会わせてしまうようなこともしない。

私小説が必ずこのような不安を読者に与えるわけでもないし、読者を不安に引き込むのがよい小説だといっているわけでもない。感じるものが、不安であれば、怒りであれば、情熱であれば、あるいは欲望であれば、本物の私小説であれば、自分自身の存在意義を破壊し、それによつて、読者の足下にあつたはずの、自己意識や現実という感覚を、あつけなく、どこかへ押し流してしまふことが可能であるといいたいのである。

一方、自分史に求められるのは、最初から最後まで明確な自己意識である。自分という存在を肯定し、その自分がどんなふう確立していったのかを、過去に遡つて発見しようという試みである。私たちは、いまも進行していている、この現実という世界では、未来について常に迷い悩んでいる。しかし、自分史の世界では、その迷いや悩みも、暖かく、余裕をもつて眺めることができるのである。

その意味で、自分史が絶対に「私小説」にはなり得ないことも確かである。「私小説」がことさら優れた小説だということではない。しかし、ほんものの「私小説」になりえない以上、本物の文学にもなりえないのではないかという気がする。

これは、決して自分史の価値をおとしめているわけではなく、ある意味でパターン化された表現形式の制約のなかで描かれているからこそ、自分史という表現形式がなりたち、著者はそこに、自分の存在意義を見つけたことができるのでないだろうか。

かなりご高齢になつてからの美澤さんの作品で、しかも小説として書かれたのではないこの記録を、小説的自分史の例として、日本文学の代表作のひとつである『死の棘』と比較してしまったのは、まことに申し訳ない次第であり、ご容赦願いたい。

高齢者には明日がない。過去だけである。人生は遣り直しがきかない。これを可能にするのは、自分史である。妻との出会い、夫婦生活の哀歓、それらを作品としてまとめることによつて、死んだはずの妻がよみがえり、生きる者さながらに語りかける。作品を完結させるまでの執筆期間は、妻

と再会して、思わず楽しめる明け暮れであった。

美澤さんが『妻恋記』の「あとがき」中で語っていることである。これを引用したいために氏の作品を利用させてもらったような気がするほど美しい言葉だと思う。自分史は、それを書くこと自体が目的なのかもしれない。これも、この小論全体の中で考えてみたいことである。

なお、『大坂町筋鳥町通り』は購入したもの。『妻恋記』は、たまたま読む機会があり、その後、発行元から贈呈していただいたものであることを付記します。

Ⅲ 歴史としての自分史——戦争体験を中心に

九七五年(昭和五十年)——この年に

自分史は歴史の一部だとする考えも根強い。そもそも「自分史」という言葉に市民権が与えられるようになったのは、歴史家である色川大吉氏の『ある昭和史―自分史の試み』(一九七五年、中央公論社)の出版以後だろうといわれている。いわゆる通常の(歴史記述の観点からは無名である)人々が自分の記録を表現する行為にも歴史としての意味があることを、専門家が考え抜いて、日本の言論界ではじめて主張したからである。とすれば、自分史というジャンルは、はじめから「自分を主体にした歴史記述」という考え方をもって生まれてきたのだといえるかもしれない。色川氏は『自分史―その理念と試み』(一九九二年、講談社)の第一章「自分史とは何か」でこういつている。

一九七五年、昭和五十年、おそらく日本の言論界ではじめて「自分史」という概念を持出して私は著書を公刊し、十万を越える読者に迎えられた。その本の第三章に「ある常民の足跡」として「ふだん記」運動の指導者橋本義夫のことを八十余ページにわたって紹介したことが“庶民の文章運動”のひとつとしての自分史を流行させる発端になったと思う。

『自分史―その理念と試み』には、色川氏自身は「叙述としては失敗だった」と述べているが、自らの昭和史が、自分史として書かれている。一九二五年、大正最後の年に生まれた色川氏にとって、昭和は自分の同時代と感じられることがあったと思うし、二十歳まで、常にその渦中にあった日本の戦争時代は、まさに自分の人生と歴史が直かに交差し、明確な像を形作っていた時代だったはずである。

私は思う。自分史の核心は歴史と切り結ぶその主体性にある、と。自分

と歴史との接点を書くことにある。だから、「自分×(かける)史」なのである。自分の人生の方向を決定づけたような原体験(最も重い経験、その後の経験のもとになったような体験)を記述することによって、その時代の活きた情況——世相、風俗、社会意識やそれに捉えられていた自分の姿を描き出す。やさしくいえば一人々々の庶民の切実な自己認識の歴史なのだ。(『自分史——その理念と試み』)

当然ながら、人間には、自分自身が直接あるいは間接に経験した経験やその時の感情、思考を通じてしか、人生の真実はわからない。しかし、その真実も、人間が必ず社会的な(ということは歴史的な)存在である限り、社会全体の流れとの関係なしには、本当に分かったとはいえない。とすれば、単純な生活記録というものから、一歩進んだ、自分という存在を媒介とした歴史記述あるいは歴史を介在させた自分の生活史が次に目指すべき真実になる。色川氏の考えによれば、これが自分史であるということになるのではないか。

歴史記述とは、人間社会の時間的推移の中になんらかの意味を見出し、その筋道を検証したものである。氏自身も別のところでいっているように、もちろん、それまでに個人の人生記録がなかったというわけではないが、個人の生活史と歴史の動きを自覚的に結びつけたこの記録を、歴史家としての色川氏が新しい概念「自分史」として提出したのである。「自分史」がそうした中で生み出された新しい視点であったとすれば、日本の昭和という時代と、その中の戦争に無縁であるはずがない。少なくとも私はそう思う。

そして、自分史を歴史だと考えようと、文学だと考えようと、まずどうしても、アジア太平洋戦争を中心とする「日本人の戦争体験」から語らなければならぬことになる。最初に自分史を提起した色川大吉氏の人格・思想形成に戦争体験が切り離せないものであるように、戦後のある世代までのすべての日本人には、自分の過去の生活から戦争体験を引き離すことができないためである。

これは私のごく小さな体験になる。

一九七五年(昭和五十年)、私は印刷を中心としたある業界新聞社の駆け出し記者をしていた。印刷業界も景気のいい時代で、週二、三回の通常号のほか、年に数回、数十ページにおよぶ臨時増刊号を企画・発行していた。この年の夏の「暑中特集号」に、自分たちで発案したと思うのだが「私の戦後三十年」という特集企画を立て、発行していた業界新聞の読者を中心に多くの印刷人

(主として経営者)に原稿を依頼した。ご存知のかたには納得していただけるだろうが、中小企業の経営者という人たちは(ごく一部を除けば)文章など書くのはお金をもらってもいやだというひとが多い。実際、原稿を書いてもらうのに私たちはいつも苦勞していたのだ。

しかし、この時だけは予想以上の原稿が集まった。「戦後三十年という企画なのではじめてお宅の新聞にペンをとった」というひとや、掲載が終わったあとで原稿を持つてくるひともいて、特集号で収まりきららず、通常号でも何人かの原稿を載せた記憶がある。

これは、私の短い業界紙記者時代の思い出だが、今思うとあれは、ほんの小さな記録ながら、それぞれの自分史だったのだ。そして多くの人が「戦後三十年」という言葉に触発されて、戦争と敗戦をはさんだ日本の歴史に、自分の歴史を重ねて、それを表現する気持ちになったのである。その頃の経営者には五十代歳後半から六十歳代前後のひとが多かったように思うが、戦地からひきあげて、あるいは焼け跡のなかで生活をもとめて、印刷会社を開いたり、廃墟から再建したりという経歴をもっていた。その記録のほとんどが一種の戦争体験であったことを今でも覚えてる。

それから三十年以上たち、あの文章を寄せてくれた印刷人はほとんど現役を退き、あるいは他界し、私がああの頃の経営者の年齢になってしまったが、この一九七五年という年あるいはその前後を振り返ってみると、本当に不思議な気がする。

さきほどの色川大吉氏の『ある昭和史―自分史の試み』が出版された年が、まさにこの一九七五年だった。また、色川氏はさきの『自分史―その理念と試み』の別の箇所で、「今、思えば」という形で、その一九七五年(昭和五十年)前後を「ふだん記運動第一期の開花期」と称している。

一九七五年(昭和五十年)五月、「ふだん記」が第三十八号を出したとき、組織は八王子にしかなく、各地グループはまだ生れていなかった。そのため百五十人ほどの全国の文友たちはこの八王子の雑誌に投稿を集中していた。橋本義夫はその投稿の中から琴線に触れるものを次々と選びだし、せつせと手紙を書き、直接に逢い、その経験の貴重さを説き、才能を讃えて、連載をつづけるよう励ました。これまでこうしたことでは誉められなかったの庶民は、橋本の愛情に支えられ、涙を浮べて感謝し、水垢

離をとる必死の思いで一世一代の記録を書き綴った。そのためであろう。この時期の個人文集や自分史本には、日本庶民文章史に残る珠玉のような佳作が数多くある。私などもそのころ読んで、その迫力に驚嘆したものである。

たびたび登場する、この「橋本義夫氏のふだん記運動」とは、戦後、東京都八王子市ではじまり、その後日本各地に広まった文章運動のことである。日本での生活記録活動としては、山形県山元村（当時）の中学校教師であった無着成恭氏が教え子の中学生たちの生活記録をまとめて、一九五一年（昭和二六年）に刊行した『山びこ学校』がよく知られている。この「生活綴方」運動が教育の現場を越えて、大きく社会に広がっていった過程は今では想像もつかない規模だったといわれる。こうした活動が地下水脈のように続いていたことが、後の運動の基盤になったのかもしれない。多分、橋本氏らが運動を始めた一九六〇年前後には、こうした戦後の「民主主義」「表現の自由」がもたらした開放感の余韻がまだあったのだろう。

そして、十年間あまりの離伏期間を経て、運動は着実に実ってくる。ふだん記運動も含めて、こうした文章記録運動のテーマは戦争体験ばかりではなかった。もつと身近で切実な自分たちの身の回りの出来事も主要な題材になったと思う。それでも身の回りのどこかに戦争の形跡が残っていたし、過去を振り返れば、親類や家族の誰かに戦争の犠牲者がいた時代である。多くの戦争体験記録が生まれた。

そして、この年、一九七五年は、こうした戦争体験を含む生活体験記録の発表が大きな広がりを見せる時期になっていた。そして、あえていえば色川大吉氏が「自らの歴史」を自分史の試みとして、この年に発あらわしたことに歴史的な意味があると思う。

アジア・太平洋戦争（世界史的には第二次世界大戦）が、世界の歴史の上でも最大の事件であったことは間違いない。日本の歴史のなかでは、さらに特別だったのではないかと思う。そして、この戦争にいやおうなく参加させられたすべての人々にとつて、この戦いの様相とそれが終わってからの戦後復興が人生の最大事であったこともまちがいないところである。そして、この年、一九七五年には、そういう人たちがまだ社会の中核にたくさんいた。この小論で「戦争」という場合には、ほとんどこのアジア・太平洋戦争を指していることは

うまでもない。

その体験が悲惨であればあるほど、こころの傷も大きく、それをふりかえるのは耐えられない。また、戦後復興の生活に夢中で、過去を振り返る余裕もなかったのかもしれない。しかし、三十年経って、ようやく悲惨な思いの傷口もふさがり、身を切るような辛い思いをすることなしに過去を振り返ることができるようになった。時間の余裕もできた。世界のなかでの日本の地位も安定してみえる。何をいつても心配ない時代になった。

しかし、心の中の戦争・戦後体験はまだ風化せず、自己の体験を客観的に語ることができるとは。——一九七五年、昭和五十年前後はそんな時代だったのではないだろうか。戦後三十年という区切りの年で、マスコミなど社会的にも関心が盛り上がっていたこともあるだろう。これは想像以上に強い要素かもしれない。私の業界紙記者時代の体験も、当時はそんな意識はまったくなかったのだが、こうした日本全体の機運に“便乗”したものだと思った。

この年は十五年にわたって続いていた、いわゆるベトナム戦争が最終的に決着した年でもある。このベトナム戦争の詳細な経過を、私たちの世代は毎日のように新聞やテレビで目にしたし、日本各地で起こっていた反戦運動に参加することは当然のような雰囲気があった。アメリカ国内でも反戦運動が盛り上がり、アメリカ全体に深い敗北感が漂い始めていた年でもあった。天皇（昭和天皇）が史上始めてアメリカを訪れ、アーリントンの無名戦士の墓に詣でた年でもあり、この前年（一九七四年）には、フィリピンのミンダナオ島から日本兵の小野田寛郎氏が帰還していた。少なくともこの年まで戦闘行為を継続している日本人がいたわけである。

戦争時代をくぐり抜けてきた日本人にとって「戦後が終わった」と意識されたのがいつであったか、私には実感としてわからない。しかし、この一九七五年が多くの日本人にとって印象の深い年であることは確かだ。

これも、まったくの偶然だと思うが、やはり、この年（一九七五年）に出版された『虜人日記』（筑摩書房）という記録がある。陸軍の囑託であった技術者の小松真一氏が敗戦後、レイテの捕虜収容所にいたときに書いた戦争（捕虜）体験記なのだが、事情があつてこの年まで三十年間世に出なかった。この本については評論家の山本七平氏が、特にその後半の日本の敗因二十一カ条を分析して『日本はなぜ敗れるのか―敗因21カ条』という一書を別に書いている。そ

の中で山本氏は「戦争の体験者も非体験者も、共に本書（虜人日記）を読みうるには戦後三十年が必要だったかもしれない」と述べている。こういうこともあるのだろうか。

その後も書かれ続ける戦争体験記

戦争中の日本軍人の多くが手帳と鉛筆を携帯して戦場での日々の出来事や思いを書き続けていたことはよく知られている。旧日本軍のこうした寛容さは一種の前近代性・非合理主義をあらわす象徴でもあるが、日本人の精神文化の現れでもある。日本の兵士は「明治以来の日本の歴史と戦っていた」とよくいわれるが、皮肉にも、その文化的伝統も受け継いでいたわけである。

そして、敗戦。負けたことは大変な悲劇をもたらしたが、その原因、責任を追及し、歴史や文化を反省するという意味では、勝った側よりはるかに深く考えなければならぬという思いが人々を突き動かすことになった。

後でも述べるように、底流としての戦争体験記録は戦前、戦中から発表されていた。しかし、現在私たちが見るような、自由な、完全な意味での戦争体験記録が書かれるようになったのは太平洋戦争終了直後からだろう。

まず、文学作品としての戦争体験が書かれ始める。文学者（あるいは文学者として出発するようになる人間）たちにとって、この戦争の体験あるいは兵士体験がどれほどの重みを持つものであり、重要なテーマであったかはいないでもない。おそらくこの戦争に完全に無関心であった作家などひとりもないだろう。中でも、大岡昇平の『野火』『俘虜記』、島尾敏雄の『出発は遂に訪れず』、野間宏の『真空地帯』、梅崎春生『桜島』などが戦争文学の代表作として名高い。いずれも戦争文学といいながら闘いの場面がほとんどなく、いわば軍隊生活内部での人間記録とでも呼ぶような作品なのは、日本人が投げ込まれたこの戦争の現実をよくあらわしているともいえる。大西巨人『神聖喜劇』のように二十数年あとに発表された作品もある。

しかし、戦後の混乱時代から、こうした作家たちの小説と比較にならないほどのおびただしい数の戦争体験記録が書かれ、発表され、読まれていた。多くの国民にとって予想もしない敗戦と惨めな混乱。その責任と怒りを誰にどうぶつけるのか。戦争の真実とそのなかでの兵士や国民の苦しみを知りたいという

欲求がすぎまじいエネルギーでこうした記録を生み出したともいえる。そこには、文学者たちの書いたような残酷な兵士体験が、日常生活の言葉で書かれ、戦争の現実が戦史とは違う人間の声で書かれていた。いわゆる戦争文学を「誰がどのように書いた」かでなく、「何を書いたか」だけで考えるなら、表現者としてはアマチュアである無名のひとびとの記録が圧倒的なのである。

戦争を体験したのは兵士だけではない。ある意味でより過酷な、悲惨な運命に見舞われ、戦後も長く厳しい生活を送らなければならなかったのは一般生活者だった。空襲、疎開、外地、原爆——あらゆる場所で、悲劇と生存のための闘いが繰り広げられた。この人たちは、まことに理不尽なことに、戦後も引き揚げ者や障害者、被爆者というだけで差別され、困窮した生活を送らなければならなかった。

戦争から帰還したり自ら、戦争や空襲を体験した、こうしたひとたちが記録を書き、それを積み重ねていくためには、あとから盛んになってくるマスコミの協力も反戦運動の支援も「戦争体験の継承」を呼びかける自治体の存在もいかなかった。他人には触れられない、それぞれの個人の内面での理由だけが必要だった。

そして、これまで述べてきたように戦後三十年目である、この一九七五年（昭和五十）年が、こうした戦後の積み重ねられた記録の発表にとっても意味をもつ年になったと考えることができる。

これもまた象徴的なことかもしれないが、この年に、自らも被災者である作家の早乙女勝元氏などにより「東京大空襲を記録する会」が結成されている。以前にも、もちろんたたくさんの戦争被害者としての記録があったが、これを期に、全国各地で「空襲を記録する会」の運動が盛り上がり、証言活動は全国の草の根レベルで行われるようになった。この時代にはようやくこうした運動も偏見なくやれるようになったのだろう。また、それを抛り所にして、自分たちの人生を切り開く力にしようという指導者があらわれ、引き継ぐ者が出てくる。いままで、語られることのなかった庶民の戦争体験が多く生まれることになり、これは連綿として、現在まで続いているとみることができるといえる。

ンフィクションの力作だが、この中には、実際にガダルカナル島の過酷な戦場で闘い、生き残った兵士達の手記や兵士からの聞き書きが驚くほど大量に収録されている。そのひとつに、戦闘中に書かれたという望月茂という陸軍小隊長の手記があるのだが、亀井氏は本文中に掲載までの経緯を「(望月)氏は最初のうち、転載させてほしいという筆者の申し入れを拒んだ。文中に出てくる死者の遺族が読むかもしれない、というのがその理由だった」と記している。これも、最初は死んだ兵士達の遺族(特に父母だろう)への気遣いがあったこと。それが長い年月の中でいらなくなったことを示している。戦闘といっても、ジヤングルの中を彷徨い、餓死者を埋葬するだけの日々だったことはいうまでもないことだからである。

さらに、この戦記の文庫版の「あとがき」で亀井氏は「従来、ガタルカナル島の土を直接踏んで戦闘に参加した各部隊の記録は、いわゆる聯隊史をふくめて世に出るのが遅れていた。(略)それが昭和五十年前後になって、まるで申し合わせでもしたように、聯隊史およびそれに準ずる記録がはじめて私を鼓舞した」と述べている。望月氏の手記もそうだと思うが、『ガタルカナル戦記』に使用された実際の兵士個々の戦争記録は一冊の本の形よりも、個人、戦友会などの発行する非売雑誌などに掲載されることが多い。これも含めて、一九七五年前後から戦争体験記が増え始めるという亀井氏の印象は私の実感とも一致する。

また、個人的な体験を出すことになるが、これも二十五年以上前、私は業界紙記者をやめて、ある印刷団体の事務局に勤務していた。会員には謄写印刷から身を起こした経営者が多く、当時は軽印刷とっていたが、小さな企業が多かった。ときどき、その会員から頼まれて、個人の原稿を預かり、編集作業を行うことがあった。まだタイプや手動写植機で文字組版を行っている企業が多い時代で、事前の編集作業は不可欠だった。といっても、読みにくい文字を直し、意味のわからない部分を補うといった程度なのだが、その中にいま思えば戦争体験の記録があった。数少ない経験にしてはいくつかの内容まで覚えていたほどだから、当時、一九八〇年代には、そうした記録がかなり多く出版されていたことがわかる。いまのように大手出版社まで競って自費出版を行う時代ではなかった。こうした小さな印刷会社が個人の記録出版活動を黙々と引き受けていたのである。

『失われた兵士たち―戦争文学試論―』にみる戦争体験

ここまで述べてきたような大きな出来事と一緒にするのはおかしいかもしれないが、この年、つまり一九七五年に、『失われた兵士たち―戦争文学試論―』という論考が、ある雑誌に連載され始める。連載は二年間続き、同名の単行本として発行された。著者は、その二年前に芥川賞を受賞していた野呂邦暢氏である。雑誌は「修親」という自衛隊員を対象にしたもので、野呂氏は五年後に夭逝してしまうが、この本のおかげで私たちは、有名無名の兵士たちの記録に「単なる反戦思考でない立場」から接近して考え抜いた結果を知ることができる。

いうまでもないことながら、大部分の戦争体験記録は「自分史」として意識して書かれたものではない。まして、戦争直後に発表されたものはそんなことを考える余裕もなかったにちがいない。想像もできない苦難・苦痛を体験してきた人たちのなかから、多くの貴重な記録が生まれてくる。そのひとたちの思いはなんだったのだろうか。それを考えるために、この「失われた兵士たち―戦争文学試論―」をみてみることにする。

この論考は「戦争という異常な極限状況において日本人が何を考え、何をしたかということ」を当事者の手記をもとにたどることが私の目的である。「（「はじめに」より）と著者がいつているように、戦争そのものがテーマである。戦争について書かれた個人の記録を野呂氏はすべて「戦争文学」と考える。この時、著者の属性はすべて等価値になる。大岡昇平、島尾敏雄、野間宏のような戦後文学の旗手も、無名の一兵卒も同じように取り上げられていく。その理由は明白である。

戦争について書かれた莫大な数にのぼる記録がある。文学の域にまで高められていないという理由で軽んじられ話題にもならず忘れ去られた書物の一群がある。私がとりあげるのはそのような本である。兵士として戦場へおもむいたのは高い教育をうけた文学者ばかりではなかった。農夫、漁師、会社員、教師、神官、炭屋、理髪師、学生、船員、タクシー運転手、鉱夫、肉屋、仕立足、樵夫等あらゆる階層の人間がいたのである。作家はそのうちひとつまみにすぎない。

(略)

世人の耳目をひかなかった文章、すなわち九死に一生を得て帰国した来

た無名の人々が、有名になろうとかひと儲けしようとかいう下心なしで、家業の合間にこれだけは子孫に伝えたいと心血を注いで書き綴った文章を中心にこの小文を進めていきたい。

（「はじめに」より）

公刊戦史のように無味乾燥に戦争の推移の詳細を追っているのではなく、その中で兵士の考え、生き方を探ろうという考えがよくわかる。また、多くの日本のプロの作家が書いた戦後文学は基本的に戦闘を含む戦争全体を描いたものではないので、作品としてはほとんど論じられていない（大岡昇平の『レイン戦記』は取り上げる予定だったようだが、一部の引用を除き、実現しなかった）。自衛官に読まれる雑誌に連載された論考であり、野呂氏自身も自衛隊出身者だが、当然一文学者としての立場で書かれたもので、あの戦争を正当化したものでも美化したものでなく、私には、左右の妙な偏見からはまったく自由であるように思える。

野呂氏は、この本のある部分で、この年が戦後三十年であることにふれて、さまざまな記念企画がマスコミに氾濫する中で、なぜ自分がこうした形で戦争体験を追求しているのかを自問して、こういつている。

死者たちの声を聴きたいが、彼らは永遠に黙して語らない。戦場で死と生のきわどい境界にたった人々はその経験の実質が、あまりに重い故にたやすく言葉で表現しようとはしない、こうして二種類の帰還者が生まれる。あくまで沈黙を守る人々と、苦しみながらも自分の経験を書きあらわそうとする人々である。（略）この人たちは書かずにいられないから書くのである。自分のしたこと、受けた苦しみ、を書くことで追体験し、再確認するのである。兵士としてあるいは将兵として、昭和の一期に果たした役割は何であったか、という歴史的な立場からの見方よりも、一回限りの個人的人生と昭和史が交錯するとき、そこに現出した場が何であったかの関心のほうが強いと私は想像する。

（「第五章 生者と死者と」より）

こうした立場で読まれ、紹介されている記録は、巻末に掲載された書名だけで百二十冊を超えているが、実際には野呂氏はおそらくこの数倍の記録を読んだと思われる。一部によく知られた記録があるが、大部分は無名の一市民が、何年もかかって自分の目と足で調べ、費用をかけて出版したものである。

この本で取り上げられている記録のほとんどは入手が難しいし、引用されて

いる数多くの体験記の内容も、実際に読んでいないので詳しく紹介はできない。ただ、それを残すことが、多くの死者たちへの慰霊になるという思いから書きあげられたこれらの記録の真剣さと重み、真実を伝えたいという熱意を疑うことはできないということをおきたい。

そういうながら、孫引きで引用するのも心苦しいのだが、同じくこの本の第五章に引用されている丸山豊氏の『月白の道』の一部だけを紹介させていた。だくことにする。丸山氏は軍医少尉として、緒戦から敗戦まで、兵士の八割以上が帰還しないとされるビルマの戦場を転々とした経歴を持っている。以下は「あとがき」から。

けれども、中国雲南省および北ビルマにおける戦争体験は、生あるうちに一度は散文として書きのこしたいと考えていました。まずは無念な死者たちへの鎮魂のため、つぎは私自身の痛みをあらわにするため、そして戦場のありのままを訴えるため、あの荒涼と絶叫を、いつかは記録しなければならぬと思いながら、ついつい二十五年をいたずらに経過してしまいました。

以下も丸山氏の『月白の道』の序章からの引用である。

私にとつて、戦争の記憶は、とりもなおさず、抜歯のきかぬ虫歯である。折りにふれて痛みだし、世間智におぼれそうな私を、きびしい出発点へ引きもどす。みずからへの問いがはじまる。戦争とは何であったか。死をくぐりぬけるとはどういうことか。最後にそこでなにを決意したか。戦友の末期の声はなんであったか。(略)

私がかここでいおうとしているのは、どの政治的な考え方が正しいとか正しくないとかいう大それたことではなく、それ以前の、人間がそこで産ぶ声をあげるもの、桜色のヘソノオのようなもの、そのかなしさなつかしさのなかで、つねにはつきり目ざめつつけたいという願いだである。

戦争の記憶を医師らしく比喩しているが、そこで経験した極限の中での人間の希望と絶望、人間性と何なのかという思いを、「私自身の痛みをあらわにする」という表現で、二十数年後の平和な時代のなかであえて言わなければならなかった。その説明を理解してもらうのは困難だと丸山氏自身も感じていたのかもしれない。

生命の危機にさらされこともなく、避けようのない過酷な体験もない私のよ

うな者には、大変おこがましいことながら、丸山氏がこれを書いた気持ちや、野呂氏が丸山氏の記録を引用した気持ちが少しはわかるようだ。それは、戦争という極端な状況でなくても、社会の中に存在する組織や機構の中で、あるいは日常生活のさまざまな関係の中で、人間のこうした局面をみる機会があるからだ。体験記録が普遍的な価値を持つ意味はここにもあると思う。

戦争記録を書いた方々は、多分、自分の書いた記録は単なる個人的な記録ではないと思っっているに違いない。まして、後年、色川大吉氏が名付けたような「自分史」として自覚的に書かれたものではないだろう。ただ、その記述の底には、もし戦争の真実のようなものがあればそれを伝えたい、残したいという切実な思いがあったのだろう。そして、戦争のような歴史の狂気の中でも目をさましているひとたちがいたのだ。その記録をよめば、個人的な記録の集積が、歴史という巨大な骨組みに血肉を与えていることがはっきりわかる。

これらの戦争記録が、なんらかの自分自身の切実な事情、思いに動かされて書いた真実の記録であるとすれば、それが「記録文学」であることは当然なのだ、ここで私が考えている基準にしたがって「自分史」とよんでもいいのではないだろうか。

話が混乱するかもしれないが、戦争体験は、兵士や学徒動員、空襲、疎開という、実際の戦争を生で体験した人たちだけにあるものではない。私のように、戦後生まれた人間でも、特に深い関心があったわけではないにもかかわらず、特に少年時代だが、空襲や被爆、大陸からの引き揚げ、シベリアでの抑留者などの体験者の話を聞く機会がよくあった。あるいは記録作家の作品のなかで悲惨な事実や時には感動的な物語を読んできた。ヨーロッパでもロシアでも、恐るべき戦争の事実と人々の悲劇があったという歴史的事実も知った。これも間接的な戦争体験になると思う。

しかし、私が実際に読んでいたものといえば、よく知られている小説や作家の作品であり、せいぜいが高木俊朗や柳田国男などノンフィクション作家の戦記であった。つまり、つまり、この小論で取り上げているような無名の体験者の記録を読む機会はほとんどなかったということである。その後、自分史についての関心を少し持つようになってからは、最近になって出されたいくつかの

記録を読む機会があつた。しかし、その印象は、少し違うものだった。戦争体験について書きながら、実際に私の読んだ記録について取り上げないので気持ちが落ち着かない。その理由の一端は次章で論じたい。

『失われた兵士たち―戦争文学試論―』の引用で埋まってしまったことも不見識といわれても仕方がないが、私のこれまでの体験の中で、野呂邦暢氏のこの本以上に感銘を受けた戦記論はない。しかし、野呂氏はすでに亡くなっているので、この『戦争文学試論』が、本当の『戦争文学論』に発展する可能性はない。私にできることはこのくらいしかないのだ。

IV 過ぎゆく時間の中で―最後の「戦争体験」

前章でみたように、戦後三十年目前後を頂点にして実に数多くの戦争体験記録やそれをテーマにした作品が書かれてきた。すでに戦後六十年以上を経た現在でも、その数は減ったが、依然として書き続けられている。本当にこのような記録がほかにあるようには思えない。

しかし、最近の十数年をみてみればわかるように、戦争体験記の内容は明らかに変化している。長い年月による記憶の曖昧さはある。それは間違いないことだろう。しかし、それだけではないのではないか。

それを考えるためには、もう一度戦争体験の生まれた背景を、別の視点から眺めてみる必要があるだろう。

なぜ戦争体験を書いたのか

戦後のある時代においては、「記録を書くこと」は、なにより時代への証言という義務を果たすための行為だった。社会全体に戦争体験者が多く、戦争へ反省とそれを引き起こしたものたちへの怨嗟が失われていなかった時代には、戦争の真実を知りたいという欲求はmほとんど誰もがもっていた。目をそむけたい反面、強い関心が絶対にあった。

しかし、時代への証言としての、こうした戦争記録は、いまなお求められているのだろうか。答えはあきらかである。

毎年、いまでも、八月前後になると、隠された戦争の事実が発掘され、マスコミに登場する。映画やテレビではこの最後の戦争を舞台にした悲壮な物語がいまだに世界中で創られている。ひとびとは、あの悲劇をまだ忘れていないのだと思いたいのだが、実際はどうだろうか。平和な時代のわれわれは、あたかも歴史上のご先祖様があらわれたかのような好奇心で終戦記念日の新聞記事

を読み、ちよつと現実感のある歴史ドラマとしてそうした戦争映画を楽しんでいるのではないかと、これは自分自身の実感でも感じる。

「記録を書くこと」には、もうひとつ、自ら負った「戦争の傷」をいやすことになるという面があった。また『戦争文学試論』を持ち出すことになるが、その最終章「滅亡と救済」のなかで野呂氏は「文章を草するということは、先に言及した『人間生活の不安定な構造を徹底的に破壊するもの、潜在的な人類の獣性を表面にうかび上らせる崩壊的な力』に対抗するもう一つの力、いつてみれば人間としてのあかしではないかと私は考えるに至った。それでこそものかきを生業としない兵士たちが、帰還してから多くの戦記を書いた理由がわかるというものである」といつている。「戦争の傷」というまでもなく肉体的な損傷ではないから、自分自身のことばかりでなく、ともに闘い、生き、死んだ仲間や肉親へのいい知れない思いが込められていることはいうまでもない。内密に持ち帰らなければならなかった戦場の真実を、他人に語るることによって、自らの心の負担を軽くしたいという気持ちも当然あっただろう。

しかし、ここでもまた、こういうしかないが、「心の傷」を埋めるために書かれなければならなかった戦争体験記録の出現も、先にも述べたように、おそらく一九八五年（昭和六十年）の前後にとりあえず終息したと、私は考えている。

この年は戦後四十年だから、人間の生存年齢を考えれば、当然ともいえる。そして、それ以後、数は少ないが、それまで沈黙していた人たちが記録を発表しはじめる。しかし、その内容は明らかに変質しているのだ。

戦場から帰還した人たちのなかには二種類のひとがいた。地獄を経験した戦争体験者はそれを語らず、戦争の崩壊的な力に遭遇したひとは、死んだ兵士や自分の存在意義を再確認するために記録を書いた。これが先ほどの野呂氏の考えである。どれだけ時間がたつても癒えない傷も消すことのできない不名誉もあるだろう。それをさらけ出せという権利は誰にもない。だから、そういう経緯で戦争体験を語らないひとを私は認める。しかし、戦争体験者にはもうひとつ、「戦争の地獄」にも「戦争の崩壊的な力」にも遭遇しなかったひとたちがいるのではないだろうか。そして、特に最近の戦争体験の多くはそういう人たちによって書かれているのではないだろうかと私は思っている。

もちろん、それらのひとたちは意識的にそういう状況を選んだのではない。

そんなことができる時代ではなかった。とすれば、いわゆる運がよかったのか。それもあるだろうが、もうひとつは、あらゆる日常生活のなかで私たちが遭遇する庶民（普通の人）の本能的な知恵である。よくいえば優れた現実対応力とあっていいかもしれない。これが彼らを地獄のような状況に追い込まなかった。あるいは追い込まれても、それさえ気にしない強さを与えていたのではないかと思う。

これは、自分史の成立にも関係する大事な問題なので、少し立ち止まって考えてみたい。

野上元氏の『戦争体験の社会学―「兵士」という文体』（二〇〇六年、弘文堂）によると、戦前の日本においても、兵役を終え、外地から帰った兵士の記録が数多く出版されていたことがわかっている。あるいは、侵略戦争という不幸なことを通じてではあるが、始めて外国にいった人々がその記録を「土産話」として書きはじめる。新聞や大衆雑誌にも「武勇伝」として掲載される。戦地からの軍事郵便が記録として多くのひとに読まれはじめる。

前章で、本当の自由な戦争体験戦記録は戦後に始まるのだらうといった。これは真実だと思うが、「自由な戦争体験戦記録」というのは第二次大戦の敗北で日本人がはじめて手にした「表現の自由のもとでの記録」ということである。しかし、それでも、多分おおびらに語られることはなかったにせよ、戦前のこうした「武勇伝の伝統」が消えてしまうことはなかったのではないか。

なぜなのかといえば、どのような歴史的な大事件が起こらうと、ことに、地域共同体の中でしか生活できなかった数十年前以前の日本で、ひとびとの精神世界が急激に変わることはなかったらう。ちよつといやな想像だが、この戦前の「土産話」「武勇伝」と、戦後書かれた「戦争体験記録」の中には、相当程度おなじつながりをもった精神構造で書かれたものがあるともみても、間違っていないと思う。記録は、例えそれがどんなに厳しい戦争体験であっても、すべてが悲惨と自己反省の中で書かれているわけではないことも知っておかなければならない。

話はすこし違うが、現在に至っても、なお、あの戦争の目的を正当化したい人たちがいる。目的が正当であれば、多くの兵士や市民が命を落としたことも

正当化されなくても考えているのだろうか。そこに責任はなくなり、戦争で利益を得たものや高級士官のように作戦を高いレベルで指揮したものでも、単に「やりかたがまずく失敗した」程度の批判しかうけなくなる。こういうことを言い出す人は、今述べたような素朴な共同体の理念が、まだ現在の日本社会でも通用するという、恐るべきアナクロニズム（時代錯誤）に陥っているのだと思う。

改めて考えてみると、戦争で利益を得たものたち（必ずいた）や戦後生き残った高級将校のほとんどは、赤裸々な自分自身の記録を書いていない。その理由は、一番それをしなければならぬ彼らや彼らの精神的後継者が、一度も本来の意味での自分自身の分析と批判をしていないことによるのだと思う。

それに対して、無名の兵士達や市民は徹底的な戦争の被害者であり、責任も権力もなかった（確かに、現在の目からはどんな批判も可能だろうが、それは歴史と時代を知らないもの言いぐさにすぎないだろう。私たちは常に後からくる者に批判される運命にあるようなのだ）。だから、彼らには、あの戦争を倫理的、道徳的に考える必要もないし、戦争の悲劇を強調する必要もなかった。つまり、戦争中の自分の気持ちも、記録を書いているときの自分の感情も、偽る必要はいっさいなかった。その記録のほとんどは非売品なので、特定の人の目には触れないことも知っていた。その内容がどうであれ、これはこれで戦争のひとつの真実なのではないか。

もうひとつ、戦後に生まれた人間にとっては考えが及ばないことがある。それは、私たちにとっては、あの太平洋戦争下での生活、とりわけ戦場での生活は、想像すらできない特殊で異様な環境のように思える。しかし、実際にその時代に生きていた体験者にとってはそうではなかったということである。戦前の人間にとっては、軍体制下での生活、さらに男であれば一定の期間の兵隊生活は、ある意味で避けようのない運命として甘受されていた。国家の事業に反対するような意識が育つこともなかったし、戦争自体も、あるいは多くのひとが語るようにそこで死ぬことすらも、実際はともかく、観念の上では受け入れる準備ができていた。また、過酷な軍隊生活でさえ、それほどの苦痛を感じることなく過ごした人たちもいた。彼らの生きていた現実がそれほど悲惨だったのだということだし、兵隊生活はその人生の過程に当然のようにあった。日常生活の延長に戦争があったといういい方は比喩でも何でもなかったのだ。

現実生活者のみた戦争体験

これらの体験者は、戦後になっても、戦争の悲劇と事実を声高に叫ぶ必要もなかった。こうして、長い時間のあとで、こうしたひとたちの、凄まじい戦争体験が人生の普通のできごとのように、ごく淡々と語られているように思える記録が、最後の最後に生まれてくる。それは戦争体験の最後を告げる静かな工ピログのようにも思える。あるいはそんな格好のよいものではなく、戦争体験者の肉体と精神の終末期の象徴といったほうがふさわしいのかもしれない。ここまででおわかりのように、私が直接その発表の手助けをした「戦争体験記録」の数はかなり少ない。また直接、あるいは偶然に入手した戦争の記録も多くはない。その中からいくつかを紹介して、考えてみたい。

沖縄の激戦が八十歳の人生記録に

最初に引用するのは、中野秋俊氏の『沖縄戦を闘った兵卒の記録』（一九九四年）の一部である。偶然のように入手したもので、十四年前の発行だから最近とはいえないが、文中の記述によれば、中野さんは八十歳になったのを機にこの手記をまとめたそうなので、高齢になって書かれた最後の実戦体験記といつてよいものであることから紹介する。

明けて五月三日、朝八時頃より敵の飛行機十数機の攻撃が始まり、爆弾投下激しく、今までにないほどの爆撃が十数分続いた。この攻撃に続き、砲の攻撃も激しく、壕の外に出る事が出来ない有り様であった。間もなくして見張兵の大声が、「戦車、戦車」と叫んでいる。総員攻勢の命令が下った。私たち三人もむろん否応なしにこの戦鬪に駆り出された。もう目前五十メートルほどに敵戦車が迫り、その後には歩兵隊が続いて来た。あまりの急進に遭い、手榴弾の投げ合いを続けた。

しかし敵兵はますます増加して迫り来る。敵は爆薬の入った囊に点火して投げて来た。自分の前にいた戦友の吉田の前に落ちたので、私は叫んだ。「早く投げ返せ、すぐ爆発するぞ」と。しかし、彼は片手を負傷していたので、投げ返せないようだった。自分が投げるべく、吉田を自分の右後ろに素早く後退させ、咄嗟に自分が爆薬囊を投げ返した。ひと息ついた途端、また次の爆薬囊が飛んで来て、着地と同時に爆発したので、自分をはじめ近隣の友兵皆が吹き飛ばされた。

（「最も激しい激戦となった」）

著者は、一九四四年に満州で招集をうけ、一九四五年に沖縄に移動後、上陸した米軍と激戦を闘い、日本の敗戦後一ヶ月以上してから投降したという激烈な経歴を持っている。しかし、記述は淡々としていて、兵士どおしの友情は感じられるが、戦争の緊迫感や、こうした自分の体験を大きな歴史構造の中でみようとする様子はほとんどみられない。

気持ちには楽になったが、これに引換え食欲が無性に出て来たので、今度は食べる物を探し求めなければならなくなった。元気な者が夜を徹して探してくれたが、欲しいほどの収穫はなく、細々の食事で数日を過ごしたので、眠ると必ず食物の餅や鮭の夢を見たものだった。毎夜外に出てオオバコや芋のツル葉などを採って来てくれる方々に対し、自分は歩けぬため何も出さず情けなく、ただ感謝するのみだった。

〔同〕

中野さんには戦争は一種の懐かしささえ残る思い出になってしまっているのだろうか。もちろんそんなわけではないだろうが、意識のなかでは完全に否定できないのではないかと思う。この記録が復員直後に書かれたものならばまったく違ったものになったかもしれない。しかし結果的には、数十年後にならないと書けなかったということが、この苛烈な戦争体験をも余裕を持って振り返ることができるといったことになった、生活人としての中野さんの生涯をあらわしているように思える。もちろんもう二度と繰り返したくはないにしても、悲壮な気持ちもなく、それを思い出せることがある。戦争体験もそうになっているのだ。

海軍機関兵としての長い体験を数十年後に発表

『まあ坊の綴り方 伊23号潜水艦の真実―ある海軍機関兵の回想』（二〇〇四年）の著者の二見正一さんは大正五年生まれで、中野さんと同様、七十歳過ぎの高齢になってから、この記録も書き始められたものだという。少年時代から志願しての海軍入隊までが前半、後半は駆逐艦や潜水艦での勤務を中心とした記録になっている。戦前の相模の自然風景や人情も興味深いが、やはり軍艦での敵前上陸や潜水艦でのハワイ真珠湾攻撃隊参加の記録がなまなましい。旧日本軍では昭和十年頃の入隊者もつとも精鋭だといわれていて、それだけに戦争慣れしていたのかもしれないが（実際、氏の数々のエピソードはその精

鋭ぶりを示している）、この記録も、私からみればかなり異様な出来事が淡々と語られている。

上海の出雲（戦艦）は岸壁に横付けしているように見えたが、投錨していたと思う。2丁錨のせいか、いつもこちらから見ると横に見えた。俺達の艦は投錨すると水の流れに従って川上に艦首をむけている。上海の8月、9月は相変わらず暑い。艦内はなお暑い。居住区の舷窓を開けて飯を食っていると何とも云われない異臭で飯が咽を通らない。舷窓から水面を見ると中国兵の遺体がいくつも流れて浮いている。どこで殺されたのか。陸さんにやられたのだろうか。今日も明日もよく流れてきた。急いで舷窓を閉めるが、俺は飯は食えなかった。

（「駆逐艦響」

いわゆる第二次上海事変でのことだが、これに類する挿話がいくつも語られている。

この記述の驚くべき淡泊さは、このように戦争が日常化していたことを示しているとともに、生死に関わる状況下では直接自分の身に降りかかること以外は、こうして一見無関心にも見える態度でいることがもつとも必要なことなのだということ、そして、それを熟知している者の老練さをあらわしているように思える。

軍隊内の生活の以下のような記録は正史には絶対でてこないものだが、個人の戦争記録には必ずある。これは下級兵士には絶対に忘れられないことだからだろう。

滝田は中央に引き出され、柱に両手でつかまり、身体を45度にしてけつを打ち易い格好になった。班長は滝田のけつを殴り始めた。事業服の下は越中ふんどしだけだ。俺もお父ちゃんに入隊のときにパンツまで荷物で持って帰ってもらったので越中ふんどしだ。全員そうなのだ。初めは20くらいで終わると思っていたら100くらいやられた。滝田の顔は硬直し青くなり、ウウウと呻いて倒れた。水をかけると云った。誰かバケツに水を持ってきて頭からかけた。起きられない、動けない。俺は思った。何時も天皇の赤子だ、陛下の股肱（ここう）だとかなんとか云っていやがって、歩けないほどけつをぶん殴るとはとんでもない。俺達と一緒に11月、海兵団の新兵教育終了し軍艦に乗れるのかなと心配になった。何故（なぜ）他の班長が止めないんだ。天皇陛下がこんなことを見たら股肱だと云うだろうか？俺は馬鹿ばかりささえ感じた。たった1足の靴下の間違いで。

（「横須賀海兵団

このように、軍隊生活や戦闘記録についても、著者が実際に見聞きしたことは詳細のだが、一兵士にはそれ以外の世界——例えば真珠湾攻撃の決定経緯やその戦略的役割などの詳細はわからない。だから、この記録に限らず、多くの兵士はただ自分の見聞した経験だけを書いてしまう。

なお、この記録の基本部分を書いたのは本人だが、記録に詳細な注釈をつけ、実際の出版を行ったのはそのご子息（二見正人さん）である。今年出された「改訂版」では、書名にもなっている伊23号潜水艦の艦長が部下に託す形で残した記録を知り、それにこの艦の乗組員であった著者の見聞を重ね合わせた詳しい論考を追加している。その結果、二代かけての戦争記録ということになった。二見正人さんはこの父の記録を、時代を生き抜いた、たくましい人間の象徴として伝えたいという気持ちで取り組んだという。もし、悲惨さと自己批判だけで成り立つ記録であれば、そうは思わなかっただろう。

戦闘機の教育・輸送を担った兵士の記録だが

『呉龍記』（二〇〇三年）の著者の高橋功さんも大正四年に山形県の生まれだから、上記の二氏とほぼ同じ年齢になる。この記録を出したときにはすでに八十八歳になっていて、実際の発行作業はご子息によるものである。「息子をすべて軍人にする」という父親の元に育ち、二十歳で徴兵され、飛行兵として昭和十年に軍務につく。極寒の満州・ハルピンの飛行大隊での厳しい軍隊生活、飛行場勤務。日本に帰っての飛行隊での少年飛行兵の教育訓練教官をへて、製造された飛行機を第一線へ空輸するという危険な任務にあたるというのが記録の前半で、おもに戦争体験になっている。記憶は確かなのだが、年齢の壁はあるにしても、以下のような、生死をかけた壮絶な場面でも、どこかのどかな雰囲気は漂ってしまう。

ある日、海軍機の編隊が到着予定との無線が入っていた。午前十時頃だった。滑走路の下手から大編隊が進入して来た。我々は格納庫前のピストンにいて、皆口々に「海軍さんはまだまだ大したものだ」と言いながら空を見上げていた。ところがあに計らん滑走路の先端から地煙が立ち始めたのだ。我々は取るものも取り敢えず傍らのタコツボに逃げ込んだ。グラマン五十機程の急襲だった。それから、波状攻撃が三時間はど続いた。終わるまでタコツボから這い出ることも出来なかった。この空襲で格納庫は丸焼

けとなり手持ちの飛行機は殆ど飛行不能となった。人的被害は山田少尉が試運転中だったので機体と共に爆死した。その他飛行場大隊の兵が数名戦死した。

戦闘機の教育やその前線への輸送という重要な任務を担っていた兵士であり、かなり危険な目にも遭っているのだから、もっと早く詳細な記録を出してもよかつたのではないかと、私などには思える。

しかし実際には、この高橋さんや前記の二見さんのように、こうしたある意味で「優秀な下士官」の多くは、生き残った場合でも長く沈黙を保つことになる。思想的あるいは信念にもとづく特別の理由があつたとは思えない。いつてみれば、この程度の事件は「戦争という日常生活」の中では普通のことなだけと思ひつけてきたというしかないだろう。それが、高齢になり、また時代の流れの中で、軍国主義とは無縁の世代の家族からも経験談を残すことが求められるようになって、おもむろに記録を書き始めたというのが真相に近いだろう。もっとも、高橋さんのこの記録の場合は、もう少し違う事情があつた。それは「あとがき」の中に記された次の言葉で理解できる。

家内は常々照れ隠しかそれとも真面目にか自分たちの結婚について『おとうさんではなく、軍刀に惚れたの』と言っていました。そんな家内とも五十八年間連れ添って互いにかげがえのない存在であり、別離は悲しい出来事でした。私と家内が歩いた軌跡を、子、孫、曾孫と伝えることができれば幸いです。

文中にも、映画館での一目惚れ、文通など、戦争中とは思えない記録が登場する。そのためか、二見氏の記録と異なり、戦後、復員してからの生活もほぼ軍隊生活と同じ分量で語られている。これはこの種の戦争記録としては珍しい。この無き妻への思い出がこの本を書かせたといつていいのかもしれない。

予科練生活が人生の指針になつたと述懐

『ネイビーブルーと私』（二〇〇一年）を書いた秋庭克さんは、自らの大病を克服して、信じられなかつた二一世紀を迎えることになつたのを期に、自身史をまとめ始める。特に、貧しい家庭環境から、母親の悲しみも知らずに十六

歳で海軍少年飛行兵に応募してからの二年半のいわゆる予科練生活が忘れられない。

立ち上がって膝、腹、胸などが濡れていると「誤魔化した」「たるんでる」とバッテリーをもらう、総員である。(もらう、とは尻を叩かれる事)尻に腹巻をずらしていると、「ボン」と音が違う、半殺しに合うから、八百長をするやつも居なくなつたが、日課と成つて尻のミミズ腫れが痛くて椅子にも座れず、カッター訓練は尻が痛くて横板に座れずオールを漕ぐ力が出ない。伊勢湾での訓練だから、潮に流される、艇長である教員も鉤竿を立てて必死に沖に流されないよう号令を掛る。波が二、三メートルにも成るとオールを海水に入れて力いっぱい引く度に、波が動いて空引きする。後ろに倒れる。艇長が持つて居るつめ竿が倒れた奴の頭に振り下ろされる。

係留場に戻ると白い艦内服は血だらけでも練習生は歯を食い縛り耐えた。

戦争の最終段階で飛行予科練習生とよばれる若い兵士が激増する。ほとんどがいわゆる特効攻撃要員のようで戦死者の割合も高い。しかし、多くの者はこのように自ら希望して入つたことを誇りに思つていたし、現在の目からみれば残酷ともみえるこの生活が、後の自分の基礎をつくつてくれたと感謝しているほどのので、実際、この秋庭さんの記録からも軍隊生活の悲惨さは感じられない。「当時の苦労は能力的・肉体的な苦労であつて、生家での苦労より遙かに精神的に楽であつた」というほどだ。『ネイビーブルーと私』という書名にも、それはあらわれている。

戦争体験はおわり「語るべき過去」は終わるのか――

紹介した、どの記録も、戦争中の厳しい生活体験、戦闘体験が中心なのだが、通り過ぎた時代を、特別の被害者意識も、強い思い入れもなく語つていて、悲慘さを感じさせない。それはなぜだろうか。

秋庭さんは、戦後、地元に戻ると農業、酒屋さらに不動産業と商人の道にあるき、自社ビルも建てる。中小企業の経営者にはこのような経歴のひとが多い。最初に紹介した中野さんも、招集前から事業者として成功していたし、戦後も安定した生活を送つたようである。あとのお二人も戦後幸せな家庭生活をおくつたことは、ご子息がその記録出版に尽力されたことでも分かる。

このひとたちの記録で目に付くのは、間違いなく戦争体験が中心にはなっているのだが、記述の姿勢から見ると、あくまでも「戦争体験」も、まるで、人生の中の少し変わった体験とでも感じられるような、普通のできごとのように語られていることである。もちろん、この著者たちが、自らの戦争体験を意味のない体験だと考えているとはまったく思わない。ただ、そこにはⅢ章で紹介した記録のような、何をおいてもその経験を語りなければならぬというような、せつぱ詰まった感じがしない。その違いは何だろうか。

秋庭さん、高橋さんの記録の場合、戦後の帰還してからの生活の記述がかなり詳しい。二見さんの記録もその半分近くは、少年時代、青年時代の故郷での懐かしい思い出である。中野さんも、「おわりに」で、戦後になって、当時の上官に再会する経緯をこと細かに記している。

こうした、自分の生活を第一に考える、リアリストとしての精神の強靱さをもった市井の生活人には、敗戦によって日本の政治体制や思想、価値基準が激変したことも根本的な影響を与えていないだろう。そこには、自分たちの確固とした生活姿勢は、お偉いさん達の「空騒ぎ」には関係ない。そんな矜持さえ感じられる。誤解をおそれずにいえば、このひとたちにとっては、あの戦争も「普通のできごと」だったではないか。これが私の率直な感想になる。

そして、このひとたちの中では、すでにあの戦争も、その中で自分のあれだけ辛かった戦争体験も、長い人生の中の「ひとつの体験」にすぎないと感じられているのではないか。先に述べた「凄まじい戦争体験が人生の普通のできごとのように、ごく淡々と語られているように思える記録」という意味はこれである。

そして、これだけ切実な体験者自身がそうなのであれば、もはや、ほとんどの日本人にとって、あのアジア太平洋戦争の血なまぐさい形跡と記憶は時間のなかに消え、戦争体験は一種の歴史と伝説になっているということが確認できそうだ。政治や文化、小説、映画の世界では、いまでもあの戦争の残像がときおり現れては、話題になり、消えていく。これも現実だが、そこから目を少し転じれば、戦争自体がまったくあけつらかんと忘れられたかのようにもみえるのもまた現実である。

また個人的な体験になるが、私の娘は戦争体験どころか、私のように戦後体

験も持っていない。かなり前になるが、この娘と戦争体験について話をしたことがある。その時、ちよつとシヨックを受けたのは、この世代にとつて太平洋戦争はまったくの「歴史」のヒトコマなのだということだった。日本の歴史教育はまったくの受験教育だし、太平洋戦争についての記述にはいろいろ問題があるからあまり教えたがらないらしいのだが、そういうことばかりでなく、つまり実際の体験がないから身近に感じられないということに尽きるようだ。

この二十年ほどの中で、日本社会だけに限つても、あらゆるジャンルと階層での文化の拡散と権威の消滅が進み、私たちには向かうべき方向も目標も見えなくなつてしまつていく。同時に語るべき歴史も、ふりかえるべき過去も失つてしまつたのではないか。そして、こうした難問さえひとつも片づかないうちに、環境問題、エネルギー問題という、人間の未来に関わる大きなテーマを抱え込んでしまつたのだ。

私は少し戦争体験記録にこだわりすぎたかもしれない。しかし、私たちの背後にぽつかりあいてしまつた巨大なギャップをどのように埋め、さらに未来への展望を考えようとするとき、もちろんこたえは簡単に出せないが、少なくとも私たちの一代前が残した膨大な数の戦争体験記録は、その時の貴重な判断材料であり文化遺産になると考えている。きつと活用されるはずだし、その存在を誇りに思つてよいと思う。

それはそれとして、「戦争・戦後体験の記録としての自分史」が確実に終焉をむかふようとしていく現在、これからの「新しい自分史」はどんな形になり、どんな社会的な役割を果たしていくのだろうか。私は、自分史を個人と歴史の相関関係の中で生まれる物語と考えるならば、戦争体験が「時代の証言」であつたのと同じように、新しい時代の証言者としての自分史としてしか、それは生まれないと考える。そこには、過去の戦争体験のように圧倒的なテーマがなただけに、生きた人間の数だけのさまざまな人生模様が広がるはずである。

次章以降、あらためて出発点に立ち戻り、現在生まれつつある自分史のさまざまな可能性を考えてみたい。

IV 過ぎゆく時間の中で 一最後の「戦争体験」

V さまざまな自分史① 自分史の典型

この小論の最初で、自分史をごく単純に考えれば「ある個人の人生の記録」だといった。

この場合、私は、言葉の意味通りの、典型的な自分史があることを前提にしていた。そのような典型があるのだすれば、さらに「ある個人の人生の記録」という、共通の、とらえどころのない大きな主題のもとでの、さまざま変奏曲が存在することも当然考えられるからである。

そこで最初に、「個人の人生の記録」という確固たる動機のもとに執筆したと思われる典型的な作品をいくつか選んで、その事例のなかで、私が考えている自分史の「自分史らしい」特色をいくつか抽出してみたいと思う。

典型的な自分史といっても、個人の人生がみな違うように、作品の内容も書き方も構成も当然異なる。それでも、私が作成を手伝った中で一番自分史らしい自分史といえそうなのが『下学上達の歩み―豊かな自然と歴史に恵まれた城下町での戦前の人間形成教育賛歌―』（二〇〇六年）である。

時間の流れのなかでの誠実な記憶と記録

著者の安田春雄さんは大正末年に鹿児島県で生まれ、旧制水戸高校で学び、東京大学をへて天文学への道を志し、日米の大学などでの研究生活を送った方である。そして、この記録は、最初から最後まで、こうした自分を作り上げてくれた、戦前・戦中の環境と学校生活への限らない共感とノスタルジアを綴った自伝になっている。かなり古めかしい表現で自らつけた、その長いサブタイトルにも万感の思いがこめられているのを感じることができるようだ。

この記録が「自分史らしい自分史」という理由はいくつかあるが、そのひとつは「人間形成教育」という自ら選んだテーマに沿った、いささかも遺漏の

ない本文の構成である。

- I 薩摩健児教育を支えた地理的歴史的背景
- II 敬愛幼稚園での保育
- III 男子師範附属小学校での学童教育
- IV 県立鹿兒島第一中学校での健児教育
- V 旧制水戸高等学校での人間教育

という、安田さんが学んだ学校ごとにまとめられた章の構成があり、その中にごく自然な形で本文が書かれている。すべての自分史がこのような整った形式をもっているわけではないが、この場合はいかにも学者らしいというか、著者の人柄を感じさせるところがある。

大正十一年三月十四日、九州の南端、鹿兒島市の旧制中学校の教師だった父（尚義）と母（千代）の三男一女の末っ子として生まれた私は、所謂“末っ子”の定義通り父にも母にも兄や姉にも猫可愛がられて育てられた。

という静かな書き出しではじまり、家族、郷土そして自然環境、教育環境と、戦前の生活のすべてが思い出すままに語られる。

著者は、恵まれた家柄ということもあって、大自然の恵みと、独立・自由の気風に囲まれて育ち、また、中学卒業後は、この時代になっても全国で唯一かつ全寮制度を採用して、古き時代の旧制高校の伝統を色濃く残していると伝えられていた旧制水戸高校（茨城県）に入学する。まさに、こうした戦前のスタンダードな教育を受けた最期の世代としての、二十歳前後までの生活体験記録ということになる。

この安田さんの記録に限らず、自分史すべてに共通することなのだが、実に細かいことを覚えているものだと感心することが多い。人間の記憶力には限界がないような気がするが、そのときに流れているのは、多分、現実とは違う、記憶の中の時間の流れなのだろうと思う。何かを思い出すのではないだろうか。そして、は無意識に時間順に考える、あるいは思い出すのではないだろうか。そして、出来事は時間順に起こるものだから、順番の記憶は意外に正確である。自分史の書き方に典型的な見本があるわけではないが、このように出来事の順序に従って自然に思い出して、それを夢中で書き綴っているうちに、多くの記録が、形式的には類型的な記述構成になってしまおうのだと思う。

日曜日には母に連れられ姉や良子ちゃんと一緒に当時鹿児島には珍しい二階建ての洋館だったフィンレイ先生の家によく遊びに行った。前面芝生の広い庭も珍しかったが使われていない洋館の二階の真つ暗な部屋の探検に良子ちゃんと上がり怖くて幽霊でも出るか大騒ぎして二階を走り回ったものだった。母もクリスマスチャンだったのでフィンレイ先生と話しが合ったらしく長い間話していたようだった。このフィンレイ先生も第二次大戦のためアメリカに帰国され御元気で活躍されておられたそうだがかの地で亡くなられたようだ。

これは通っていた幼稚園での生活のひとつまの記憶だが、記述の形式としては、ほとんどがこのように時間軸に沿ってエピソードを積み重ねる形式をとっている。これが、この記録を自分史の典型と考える理由のふたつめである（実は、このエピソードをいかに効果的に記憶の中からよみがえらせるかというのが、自分史支援ツールの「売り」になっている。多くは年表形式で、年代ごとの政治情勢や流行風俗を掲載しているものがほとんどのようだ）。

ところで、この安田さんの記録は、以下のように、昭和二十一年（二十一年の時点）で終わっている。じつは、これも、この記録を自分史の典型として特色づけている理由のひとつである。

敗戦のショックで地下資源に興味を失い高校時代読んだフランスの天体力学の権威者ポアンカレ教授の本で天文学にも興味を持っていた私は翌二十一年三月東京帝国大学理学部天文学科の入試を受験し合格した二人の中の一人となった。これは地下から一転宇宙への私の鮮やかな転身だった。同じ月の十六日旧制水戸高等学校の晝鐘寮は一寮から出火し六寮七寮を除いて全部の寮の建物が焼失した。これで昭和二十年八月二日未明の米軍機の水戸空襲で殆どの校舎が焼け落ちていた水高のキャンパスは完全に壊滅し茨城県友部に移転せざるをえなくなったのも何かの因縁かもしれない。

自分史というのは、いまも現に続いている人生のなかで自分が書いているものだから、記録が終わる時点は、けっして人生の最終時点ではない。そういう制約とは別に、多くの自分史が、自分の人生のなかの特定の部分だけを記述している。これは、自分史が、単なる人生の事業報告書ではないからである。

もちろん、すべての歴史記述がそうであるように、現在に近くなればなるほど、登場する人間や社会関係は身近になり、俗な言い方をすれば生臭くなるの

で書きにくいという要素もあるだろう。そのひとが家族や世間社会のなかで安定した立場にあればなるほど、そうした状況は発生する。森鷗外が明治の世に『渋江抽斎』の中で述べているように、小説であつてもより具体的な題材は「種々の理由から」書きにくいものだからである。

しかし、それよりはるかに大きい心理的な理由としては、本来、等間隔で刻まれているはずの人生の記憶のなかに、実際にはかなりの濃淡があることである。そして、思い出され、書き留められているのは、その中の、記憶の鮮明な、色の濃い時代だということだ。なぜ、この安田さんの記録を含めて、戦前に育つた多くのひとたちの自分史の記述が昭和二十年前後で終わっているのかは、戦争体験記録のときにもみたように、あの戦争の時代が、すべてのひとと同じような強烈な記憶を残し、日本の歴史が個人の生活、感情すべてと深く結びついていた、まさに希有の時だったことをあらわしているのではないだろうか。

ひとつひとつの記録だけでは見えにくいのだが、自分史も歴史である限り、個人の立場を超えた全体とのつながりがどこかに存在するのだろう。引用した文章でもわかるように、安田さんの記録も戦争と無関係でないのだが、これを戦争体験とはいえない。むしろ時代が作り出した青春記録ともよぶべきものなのだが、このように、生涯の中で、真夏の太陽のように強烈に印象に残っている時代を中心に描くというのも、自分史のひとつの典型的な姿だ。

最後に、もっとも大きな要素がある。それは、何がなくても、かけがえのない過ぎ去った日々への思いがなくては自分史にはならないということである。当然のことだろうといわれるかも知れないが、これを抜きにしてはどんな自分史記録もなりたたない。どんなに事実が詳細に記録されていても、こうした思いが伝わってこなければ、それは単なる詳細な履歴書にすぎない。前章でもみたように、戦争体験のような、それを実際に体験していない者からみれば、思い出したくもないと思える経験の連続であつても、当の体験者にとつては、あの懐かしい記憶として意識されていることがある。

何の取柄もない水戸の町だったが散策の道すがら会つた一木一草、街角の路傍に立つ御地蔵様、町ですれ違った美しい女性などしみじみとした思い出がしみ込んでいる。この水戸での二年有余の間私は自分の総てを掛けて生活して来た。戦時下であつたが水戸は我々に暖かく美しい思い出のみを与えてくれた。

遠く九州の南端鹿児島から来て二年有余の春は夢の如く過ぎた。今瞑目

して水戸の地を偲ぶ、時美しい悠久の思い出として六十年を経過した今でも私の心の中に留まっている。

安田さんの記録の場合、旧制水戸高校時代の生活がもつとも記憶に残り、思ひ出も深いようで、記録の最後にこのようなしみじみとした感慨が述べられている。

そこに、俗にいう「過去の美化心理」があることは確かだが、それだけではない。あえていえば、もつと積極的な意味があるように、私には思えてならない。それは、遠く過ぎ去った自分の育った環境を思い起こし、過去の自分がよみがえるように表現することで、自分の人生を認め、さらに自分を再発見しているということである。

私が、自分史はそれを書くこと自体が目的なのかもしれないといったのは、こういうことになるのかもしれない。

自分史を書くこととするひとの多くは、人生の後半あるいは最終期に差しかかり、世間からは中高年とか高齢者とよばれる世代に属する人たちである。そんな世代の人たちがいまさら自分史を書いて自分を発見するとか、自分の人生を認めるなどということは、おかしなことに思えるかもしれない。しかし、実際に自分史を書くことで、社会的に忘れ去られたようにみえる自分の存在を確認することができたという人は多いようだ。この感情は、前章で述べた、戦争体験者の「心の傷を埋めるために書かれなければならなかった、人間としてのかかし」ともどこかで共通すると、私は考えている。

典型的な自分史は、そのひとにも、育った場所にも時代にも関心のないひとには、意味のない文章の羅列と読めるかもしれない。ことに、このように、ごく生真面目に書かれた記録であればあるほど、いわゆる通俗的な意味での面白い場面など少ない。しかし、私は、ただこの一点の真実と、それを伝えたいという強い熱意があるかぎり、十分にひとを感動させることができると思う。自分史を書くことは、別の言い方をすると、自分の見てきた大きな夢を描くことだといえるかもしれない。

八十六年の生涯の詳細緻密な記録を残す執念

『回想八十六年』（一九九七年）の著者の野村勉四郎さんは、明治四十四年に青森県野辺地町の豪商の家に生まれ、学習院、東京帝国大学、そして当時日本一だった大日本麦酒の役員というエリートコースを歩んだ人である。この記録もまた、良くも悪くも「自分史」の典型であると思う。なお、この自分史は私が直接その制作に関わったわけではなく、自費出版・自分史研究の先輩の方に教えていただいたものである。

書かれている内容は、家系（一族史）、幼年期、学生時代、会社員時代（国内外への転勤を含め、これが一番長い）、さらに趣味の記録、付録として家系図、人名索引と、およそ自分史に書かれるべき内容をすべて、しかも綿密に網羅している。十年かかったと自ら述べているが、その実例のひとつが十一ページに及ぶ目次である。

自分の生涯を記述するにあたり、時間をかけ、メモをつくり、たんねんに調べた結果だと思うが、以下のような細かい章節項に分かれている。

- 第1章 わが家系と生い立ち
 - 第1節 故郷
 - 第2節 家系・事蹟
 - 第3節 出生・幼年期
- 第2章 学窓時代
 - 第1節 小学校
 - 第2節 学習院時代
 - 第3節 東京帝国大学
- 第3章 ビール会社とワイン会社
 - 第1節 大日本麦酒 吾妻橋工場
 - 第2節 青島工場
 - 第3節 川口工場（1）
 - 第4節 本社工務部（1）
 - 第5節 川口工場（2）
 - 第6節 名古屋工場
 - 第7節 目黒工場
 - 第8節 本社（2）
 - 第9節 国産ワイン
- 第4章 家族のことも（略）
- 第5章 資料編
 - 第1節 野村関連家系図
 - 第2節 人名索引

最初の「家系」や最後の「野村関連家系図」は、われわれ一般庶民にはあまり関係ないかもしれない、それ以外の目次は多くの人の人生がたどる道を忠実にたどったものだが、特に、この自分史の中心ともいえるべきなのは、昭和十四年から終戦までの中国・青島工場での記録である「第2節 青島工場」の部分で、驚くことに、十六の項目と十一のサブ項目にわかれて、非常に詳しく書かれている。野村さんの場合も、やはり、思い出の中の印象の濃い部分は、この戦争時代になるようだ。

自分史の多くは、先ほどもいったように、ひとつひとつの小さなエピソードの積み重ねなので、記述が詳細になると何となく歴史書の記述に似てくる。さきの安田さんの記録と同様に、この記録もその典型である。ただ「自分史も歴史だから自然にそうなるのだ」というわけではなく、やはり方法論の問題なのだと考えるたほうがいい。つまり、意識的にこのように記述したということである。

しかし、それにしても『回想八十六年』は実に綿密であるし、十三ページに及ぶ人名索引も驚きだ。例えば少人数しか登場しなくても人名索引や事項索引をつけてみるのは有意義だとは思いますが、これはさすがに実際にはほかにあまり見たことがない。だから、自分史の特色のひとつとはいえないようだ。

記録といっても個人的な歴史なのだから常に客観的な記述ばかりではなく、個人的な感情も出てくる。そこに記述の違いもみることがができる。最初に述べた「歴史的記述」と「小説的記述」である。一番個人的な感情がはいりそうな場面から引用してみる。まず、ここまで見てきた『第4章「家族のことも」から、戦後、内地に帰った野村親子がはじめて帰省するところである。

六月末、一家六人で初めて帰省した。『レンガ』の建物は既に町役場の庁舎となっていた。喜んでもらえろと思つた祖母、伯母も他界し、病後療養中の弟も含め、父、継母みさ、そして悌吉、いそ、すと計六人が新座敷で戦中、戦後の苦難の生活を送っていた。新座敷の雰囲気にはふさわしくない古めかしい大型の仏壇に額づき、留守中の疎遠を謝し併せて無事の帰国を報告してしばし合掌したことである。

感情といってもせいぜいこの程度である。結婚の事情などは「記憶にありません」とまことにそっけない。最初の安田さんの自分史も同様だが、どうも自分史を書く男性にとつては、男女関係や家族間の愛情、感情を文章にすること

はそうとう難しいようである。

著者の野村氏は、技術者だったこともあり、（現在からみれば）大変な激動の時代を生きたとはいえ、戦争へも行かず、戦災にもあわなかつた幸運な人生と考えているようだが、そのこと自体が、「まえがき」で自ら述べているように「明治・大正・昭和そして平成と生き長らえてきた人生」を記録したいという強い動機につながったとみることができるといえる。一見して平穩にみえる人生が記録に値しないということはないはずである。そして、この記録も、読む人を圧倒するのは、自分の人生と、それを残したいという著者の熱意である。

「聞き書き」で作成された、博労の一代記の構成と内容

明治三十八年に神奈川県津久井郡に生まれ育ち、五十年間にわたって牛馬の売買（博労）をしてきた佐藤計一さんと妻の力ツさんの生活・体験を、甥にあたる佐藤健夫さんが聞き書き、まとめたのが『聞き書き博労一代―佐藤計一と妻力ツの記録』（一九九一年）である。この記録も紹介してもらったもので、私は直接その制作に関わっていない。

武蔵の国（八王子）と甲斐の国に挟まれ、古くから人物の往来が盛んだったこの地域での、明治末年から戦後までに及ぶ長い生活の記録だが、方言をそのままに、夫婦で昔話を語って、のどかで、今は失われてしまった自然と一体化した生活ぶりが表現されている。おそらく日本のどこにでもいたであろうような、特にはなばなしの出来事があるわけでも、歴史上の新発見があるわけでもない、こうした人々の記録がなぜ貴重なのか。それは語られ、一冊の本にならなければ、永遠に失われてしまうからというほかない。

体験者自身が「自分史」を書くことをしない場合、記録を残すためには、これを録音記録するか、口述筆記を使うしかない。私は、成立の経緯は別にして、記録の価値を認めたひとがそれを責任もって行い、その内容が個人を対象とした生活記録の形をとる場合、これを「自分史」の分類にいれることは間違っていないと思うし、この記録自体も自分史のひとつの典型としてみてみたい。

最初に電気がついた時によ、久男のお袋のサダがよ、あんまあし明るいもんだあからびつくらしてよ。火事だあとと思って、消すべえとって電球をぶっ壊しちゃったあことがあったあよお。

（下岩に初めて電気がきた時の話）

博勞は馬の売買だけじゃなく、農馬貸しもやったあだ。昔あ、農馬とつて、田んぼを耕す馬を丹羽、小菅、西原あたりから借りてきて、それを又、日野、立川、府中あたりの百姓家に貸してあるいたあだ。近所の衆なんかにも頼んで引いてもらったあだ。戦後までやったなあ。富士吉田の方にもよく引いたあよあ。

〔「博勞をはじめる」

『聞き書き博勞一代』は題名のとおり「聞き書き」なので、少しずつテープに録音したものをまとめたものだろうと思われる。多分時代順に体系だった話ではなかったのだろうが、実際の構成については、この記録も以下のように年代順が基本で、それ以外のエピソードをその後にもまとめる形をとっている。

- 第1章 計一の生いたちと博勞修業の話
- 第2章 カツの生いたちと計一の結婚
- 第3章 戦前・戦中の話
- 第4章 戦後の話
- 第5章 佐藤一族と親類の話
- 第6章 その他、思いつくままに

その他の特徴としては「聞き書き」の特色かもしれないが、一つ一つのエピソードがとても短いことである。ほとんど一ページから二ページ。長くても三ページにまとまっている。例えば、「学校を出てから兵隊検査までの話」のなかでは

- 「最初の奉公先を十日べえでつん出た話」
- 「二番目の奉公先からおちヨウおばあに連れ戻された話」
- 「発電所工事の飯場からみんなで逃げ出した話」
- 「借金のカタに馬を取られて鞍を背負って帰った話」
- 「井戸での奉公の話」
- 「モミツ峠の『おばけ』のはなし」
- 「関東大震災の時の話」
- 「軍縮で兵隊に行かなかった話」

というような八つの「話」が十四ページの中に詰まっている。実際の「聞き書き」の場では、もっと長く、いろいろと脱線しながらの話だっただろうから、ひとつずつの話を短くしたのは、これをまとめた佐藤健夫さんの力によるものだろう。それぞれのエピソードの最後には「聞き書き」を行った日付も明記されている。最後の「軍縮で兵隊に行かなかった話」は第一次大戦後の「世界史」

が個人の運命に作用した例で、歴史との接点を考えるにはよいエピソードだが、著者はここから世界史を試みるようなことはしていない。

また、この記録には、かなりの数の写真が掲載されている。まず、口絵八ページにはほぼ時間順に並べた写真が二三点。さらに、本文にも随所に地形を示す写真（おそらく出版に当たって新しく撮影したもの）や資料類の写真がほとんど五〜六ページに一点以上掲載されている。もちろん写真（印刷）はモノクロだが、私はここにも製作者の苦勞や思い入れを強く感じる。さらに、表見返しに周辺の鉄道・道路地図（手書き）、裏見返しにもこれまた手書きで当時の村の構成図が、一部現在と合成されて描かれている。

短いエピソードの積み重ねといい、たくさんの写真といい、手書きの地図といい、この本には、単なる自分史（一族史）として関係者だけが見てくれればよいというのではなく、失われゆく昔の暮らしや職業を記録しておくのだという、著者（佐藤健夫さん）の強い意欲が感じられる。

日時が特定されていない「思い出」もたくさんある。本来、遠い「思い出」とはそうしたものだろう。

明治の前まじゃあ、小仏峠の先の駒木野におお関所があつてよお、税金を取られたりうるさかつたあだ。それだから、人や馬もよお、小仏お通らねえで、こつちの道べえ通つたあだとよお。こつちの道べえ通つて、与瀬（相模湖）や小仏の方を人も馬も通らなくなつちまつて、苦情が来りしたあだとよお。明治になつてからも、これより信州や塩山、勝沼あたりからよお、リンゴとか、ブドウとか、反物なんか引いて、八王子あたりまで運んだあだ。（略）遠い衆は四日も五日もかけて家まで帰るだあ」

（「屋号と家の商売の話」

この『聞き書き博勞一代』のような、庶民の生活誌ともよぶようなドキュメントでは、語り手自身が歴史や世相との関連を意識していないことが多いし、意味のないことかもしれない。しかし、この記録が日本の社会から永遠に失われてしまったものを蘇らせることは確かである。ここでもわれわれを感動させるのはその記録を残したいという強い意志だ。

VI ささまざまな自分史② 技術者の自分史

男性の自分史の中では、戦争体験以外を除くと、圧倒的に自分の職業、仕事上での体験記録が多い。ただし、こうした職業、仕事を通しての「自分史記録」はこれから本格的に語られるのだと思っっている。なぜなら、戦中あるいは戦後すぐに生まれ、戦後から現在までの日本の復興・経済成長を成し遂げた多くのひとたちの記録は、その年齢構成から考えて、これから生まれるはずだと期待したいからである。人口の多数を占める団塊の世代以前のひとたちはすべてこれらに属しているし、彼らの多くは、企業や官公庁の中核として、産業経済や組織を支え、また家庭にあつては新しい家族制度を作り上げてきた。いまや、その結果や功罪に議論はあるようだが、業界や業務の歴史、伝承すべき技術や経験などはその当事者によって語られる以外にない。

通信技術研修でアジア各地に単身赴任

二〇〇三年に『僕の出張』を出版した田村正勝さんもそのひとり。一九六〇年に松下電器産業に技術者として入社、以来、二〇〇一年の退職まで、無線通信機器の開発・設計に従事してきた。特に一九七〇年代以降、通信システムの海外販売に伴い、アジア、イスラム世界に長期の単身赴任を行い、現地の人々への技術研修を行った時の経験は田村さんの心に強く残った。定年退職後、自分の生きてきたこれまでの人生体験をまとめてみようと思った田村さんは、就職以来の故郷の父母への手紙などをもとに一冊の本を手作りしたが、これが他人に感動を与えることに感激、今度は仕事で訪問した海外での体験を書こうと思っただという。

最初の渡航は一九七八年、マレーシア。羽田空港まで見送りが来る時代だっ

た。英語も自由に話せない中でも田村さんは様々な体験を重ねていく。慣れない外国での生活習慣の違いによる失敗談から、さまざま現地の人たちとの交流、その中で生まれてきた信頼と友情が、多くのエピソードとともに紹介されている。

スプーンは出てこない、周りを見ると皆右手の指を使っているではないか。空腹には耐えられない。もちろん僕も右手で一生懸命カレーを食べ始めた。それにしてもカレーを手で食うのは何とも難しいものである。しばらくして顔を上げて周りを見渡すと他の客が皆僕を見て笑っているではないか。きつと口の周りはカレーだらけの奇妙な外国人（日本人）に見えたのである。皆が愛想よく手を上げたりウインクして微笑みかける。僕はこの時現地人との一体感の幸せを強く感じ、うまい美味いというゼスチャーをしながら微笑み返した。まさにボルネオ島郊外での心温まるカレーライス国際文化交流という訳であるが、もしスプーンを持ってこさせて涼しい顔をして食っていたらどうだろう。

（「熱帯の心優しい国 マレーシア」

この後、田村さんは、アジア新興諸国の発展とともに二十数年間にわたり、アラブ首長国連邦、タイ、香港、中国などを訪れることになり、それぞれの国でも貴重な体験をし、小さな国際親善も果たすことになる。戦後の経済成長の時代、海外に進出していく日本企業の尖兵としてのサラリーマンの喜びと、その反面の悲哀があふれているような感じである。

この時代はまた日本赤軍が世界中でテロを起こしていた関係もあり、かなり危険な目にあう日本人がいたことも分かる。

夜中の二時頃、突然運転手に起こされ、何がなんだか分からぬまま車外に出てびつくり仰天。なんと軍服を来た一〇人ほどが銃口を向けて僕たちを取り囲んでいるではないか。どうやら何人かは引き金に指をかけているようである。半分寝ぼけている我々の方に一人の男がつかつかと歩み寄り「パスポートを見せて欲しい」と言った。懐中電灯で三冊のパスポートを丹念にチェックし、車のトランクをチェックしたあと「協力有難う、気を付けて行きなさい」と言われ解放された。僅か一〇分ぐらいであったが実に長く感じられ、それにしてもトランク奥の警察用無線機三台が見つからないで幸いであった。もし見付かっていたら多分その場で連行されてその日の会議はできなかつたであろう。

この記録は、日本（企業）の国際化を草の根レベルで実現させた技術者の歴

史である。世界への経済進出が何をもたらしたか、経済と企業の国際化が正しい方向だったのかは誰にもわからない。しかし、エコノミックアニマルなどと揶揄されながら、ともかくにも戦後日本の国際化は、こうした多くの善意あふれる心優しいひとたちの努力で達成されたものなのだということがよくわかる。これは政治や経済をマスメディアを通して見ていただけではなかなか理解できない。こういう記録を読むと、自分史には歴史としての意味があるのだということがよくわかる。

コンピュータ創世記の技術者の苦勞ぶり

もうひとつ、仕事を通しての自分史として『コンピュータ石器時代』（二〇〇二年）を紹介したい。これは電電公社（現NTT）の技術者として、日本の大型コンピュータでの業務用アプリケーションなどの開発に、そのごく初期から関わってきた中西研二さんの記録である。一九六〇年代は日本経済の高度成長が始まった時代だが、またコンピュータの黎明期である。

中西さんは、紙のパンチカードで入力し、OSもないというこの時代からシステムの開発に従事、家に帰る時間もないほどの激務を続けて、官公庁給与システム、札幌オリンピック通信システムなど重要な開発を次々に担当した。

電電公社の給与計算制度は、通信省、電気通信省時代からの流れをそのまま受け、支給条件などが戦後の生活給的な時代からの根本的な見直しのないまま、労働組合からの要求による新しい支給条件が付け加わる、という過去の雑多な支給条件の累積になっていた垂で不合理な支給条件だったため、熱達した給与事務担当者による判断事項が多く、コンピュータ化になじまなかった。

（略）

見通しのないまま、われわれは毎日、IBMのマニユアルを英文で読んでいた。というのはまだ日本語に翻訳されていなかったからである。このマニユアルは英語の構文がやさしく、単語えわかれば、意味が読み取れる程度のものであった。しかしこれらの単語は当時の最新の技術用語だったから、英和辞書を引いても、その単語が載っていないか、仮に載っているか、文脈に見合った日本語の説明が見当たらず、それが何を意味するのかはほとんどわからなかった。マニユアルに書かれている内容をめぐって、われわれは延々と議論することがあった。だが、得られるものは少なかった。……ビット、インスタラクション、オペレーション、オペランド、ノイズ・レコード、ラベルなどなど。輸入許可がすぐに下りる見通しも暗く、夜に

なるとお決まりの赤提灯ということも珍しくなかった。
幕末、杉田玄白や前野良沢らが、オランダの医学書『たへる・あなと
みあ』（解体新書）を読むのにたいへん苦労したということを知ることが、彼
らの苦労がわかるようだった。

（「一九六一〜一九六五」）

日本での初期のコンピュータシステム作成の舞台裏がわかるようである。
中西さんの場合、開発の苦労・喜びもさることながら、その長い開発経験の
中で、コンピュータシステムであるからこそ、実際の仕事では、その中での人
間関係や信頼関係、仕事をうまくすすめるためのプロジェクト管理が重要で
あることに気づいていて、これに関する本を出版しようとする原稿を書いていた時
期があった。しかし在職中は仕事が多忙になり、また具体的な人物名が登場す
ることもあって、それは出版することができなかったが、いずれ自分が経験し
たものを何か形で残したいということから、仕事に携わったときの様々な資料
（設計資料、会議議事録、メモ、手帳など）を七、八箱の段ボール箱に保管し
ておいたという。

在職中の旅行記録などを書いたあと、それまでの二年間の原稿に、根拠とな
る資料との突合せを始め、内容・表現ともに全面的に改訂したというのがこの
記録である。連日、一日五時間以上パソコンに向かっていたときがあったとい
うほどの力の入れ方だったそうである。

記録は詳細であり、多くの示唆にも富んでいる。中西さんの性格を反映して
か、情緒的な記述は少ないのだが、行間から読みとれるのはここでも戦後の日
本の技術者の生真面目で真剣な姿勢と生き方の実例である。

戦後四十年、五十年の間に、日本の経済と社会構造は大転換を遂げた。生産
技術、事務管理技術を問わず、この期間のテクノロジーの変遷もさまざまいま
のがあった。そして、現場では、それをささえる無数の技術者、作業者の懸命
な働きがあった。しかし、こうした作業社会の歴史は語られ、記憶されること
が少ない。こうした地味な分野の記録を正確に残しておくことは、現在におけ
る時代の証言だと思われ、自分たちが生きてきたことの証明でもある。それが
できるのは、ともに働き、時代を作り上げてきたひとたち意外にはない。

VII さまざまな自分史③ 女性の自分史

一般的にいつて女性の自分史には面白いものが多い。いわゆる通俗的な意味でそう思う。どうも男と女ではみているものが違うようなのだ。男性の自分史が、歴史や風俗、仕事という、いわば自分の外側の世界に目を向けているとすると、女性のそれは、自分の周囲の、家庭や家族、友人、知人、その中で人間関係という自分の内側を観察し、思い出になっっているものが多い。父母や親類を含めた一族のこと、その関係、思い出を書いておきたいという気持ちが強いのだろうか。

また、記述の方法にも、あきらかな違いがある。それは、I章での言い方に従えば「小説的な書き方が」多いということになるのだろうか、これは自分史だけの問題ではなさそうなので、ここでは深く追求しない。

父親への敬慕の思い

自分史『残映有情 心に残る私の人生譜』（二〇〇三年）を出版した稲垣ゆかりさんも、こうした女性のひとりで、家族や両親への思いが強く、いつまでも忘れられないという。

稲垣ゆかりさんの実父・山田直氏は、明治から昭和にかけての、歌人で仏教美術研究者である會津八一と深い師弟関係で結ばれていたそうで、手元には文学資料的にも貴重な多くの手紙や和歌を記した色紙綴などが残されていた。直系最後のひとりとなった彼女は、このことを後世に残したいいつも思っていた。そして、たまたま、教員だったご主人と一緒に教え子の同窓会に招かれ、少女時代をすごした高知県・土佐市で、かつて住んでいた家を訪れたとき、自分の生涯の記録を書いてみようかと決心する。

貴重な資料があるとか、直系家族の最後ということが、もちろん自分史を残

す契機になったことは間違いないだろうが、もつとも深い思いは、家族、親族、多くの友人たちへの忘れがたい愛情、哀惜の念だろう。彼女の場合、とりわけ、父親への深い愛情と尊敬の気持ち、それを誇りにしたい気持ちは格別であったのだらうと、私は推測している。全部で五章にわけられた内容の第一章が、父とその恩師であった會津八一との交流を中心とした内容になっていることも、それは分かる。

「父さん、母さん、ゆかりは来年八十歳になります。後一年の間に、歯が抜けるようなことがなければ、自分の歯が全部揃って八十才を迎えるでしょう。この世の人とも思えないほど、か細かったといわれた私が、とにかくこの歳まで生きてこられたのです。お二人から戴いたわが命、いとおしくてなりません。平凡な人生だったけれど、この父と、母の子として生を受けたことを最高の誇りとして、残された人生もまた、誠実に送りたいと思います」

来年八十才になった時、両親に捧げようと思っている感謝状である。そして、人生譜をまとめよう。人生八十年の記念として、生きてきた証と、数々の思い出を、自分の為に綴ってみたいと思っている。（「私の幼少期」

人生の行く末が見えるようになったころ、そう考えた彼女は、まず文章の勉強をしようと千葉県に移り住んでから、地元の文学会にはいつて、すこしずつ書き溜めていく。

稲垣さんは高等学校入学目前に肋膜炎になり、太平洋戦争の最中に長く苦しい闘病生活を送ることになる。

ある日、珍らしく人の訪れる声に昼寝からさめ、寝乱れた髪が気になる。男性の声？ 客は、姉の婚家の縁につながるT氏で、まだ幼い坊やを抱いて立っていた。

回診の後、母は自宅の用で忙しく、病室には病人一人のことが多い。六月初めに神戸で焼け出された姉夫婦が、老父母の守る実家に帰ってきたが、義兄も昔の胸の病がくすぶりはじめ、休養の必要な病人だった。

Tさんとそんな話をしながら、疲れ切った姿を見られるのは恥かしかつた。傷口からはいやらしい膿が出続けているし、一本の花の彩りもなく消毒薬の臭いの充ちた中で困惑は隠せなかった。わざわざ氣遣って見舞ってくれたというのに、布団をしつかりあごの下まで引き寄せて、きつと不機嫌な顔をしていたに違いない。

Tさんが帰った後、私はまた夢の続きのようにあることを考えていた。

戦後三年あまりたつて新葉ペニシリンの効果で病魔がいえるまで、彼女の青春はまさに霧のなかにあった。こうした思いがあるからだろうか、やはりこの時代までの戦前の記録が中心になっていて、全体の半分以上を占めている。戦後の記録もあるが、やはり期間自体は長いのに戦後の記録が短いのは他の自分史と共通している。

エッセイ風自分史の典型作品

女性の自分史（本人が自分史と意識しているかは別になるが）の場合、短いエッセイをひとつひとつ書いて、まとめる方法をとる場合が多い。いまの稲垣ゆかりさんの場合もそうなのだが、若林登美江さんの『いつだってこれからは花』（一九九四年）もそうになっている。いかにも活動的な社会生活を送った女性らしく、人間関係も大胆に書いている。以下は、その中の「毎日新聞学芸部記者（17歳から27歳）」からの引用。

結婚した理由はいろいろある。若林は両親が共に病死しており、天涯孤独であったこと。ちよつと寂しそうで酒飲みなのは、独りぼっちのせいだったのかと思うと可哀そうになってしまった。というところ、同情結婚に聞こえるが、もちろん私も彼の才能にほれ込んだことだった。別の理由は取材した相手から「食事しよう」とか「飲みにいこう」と誘われるのが煩わしくなっていた。中には定期的に電話をかけてくる人もいて、仕事中心しいと『いないと言って』と居留守を使うこともたびたびあった。

若林登美代さんは元毎日新聞学芸部の記者で、NHKプロデューサーと結婚、記者引退後も芸能プロダクション、ピザレストラン、健康食品会社、化粧品会社を経営し、さらにその間に二回の結婚と実に多彩な人生を歩んだ女性である。この記録は大変面白く、いわゆる読ませる文章の自分史になっているのが大きな特徴といっている。文章を書くのを仕事にしていたひとが自分について自由に書いているわけだから「読ませる」ものを書くのは当たり前といえるかも知れないが、波乱の人生もさることながら、その渦中での自分の気持ち、心理

をその揺れる部分まで含めてしっかり書き込むことは相当に難しい。しかし、この場合、読ませるためには、それが欠かせない要素なのである。最初にいったように、女性の自分史に見られるこうした心理描写が、ともすれば単調になりがちな文章に色彩をあたえていることは確か。離婚に至る心理も面白いので紹介する。

（夫である）若林の仕事がなくなって浪人中、私は彼を励まそうと、何度かハッパをかけたか分からぬ。男の人はそれで発奮すると思っていたのだが、彼は逆に自信を失い、ダメになっていった。この歯がゆきは一緒に暮らした者でなければ分からないだろう。

もうひとつ、読ませる工夫のひとつは、ひとつずつの話が、短いのだが、起承転結がうまくメリハリがあること。短いもので四ページ、長くても十ページで話がまとまっているのだが、編集者が適当に分割して見出しをつけたというのではなくて、ひとつのテーマごとに完結させて書くようにしたようで、いつてみれば、ひとつひとつがエッセイ、時によると短編小説になっていると考えたほうがいいのかもされない。

多分、こうした方法が、「自分の歴史を書く」というような大上段な気構えから救ってくれただろうし、どこからでも取りかかれるという点では有効な方法だったのではないか。

ただしその反面、ちよつと気を抜くと、自分史を書いていたつもりが、ただの身辺雑記あるいは本当の随筆になってしまう危険性もある。身辺雑記や随筆がいけないというわけではないが、人生の記録という当初の目的をはずれるし、話の一貫性も失われる。実は、この記録も、最後の部分、いわば自分史が現在に達した時点からは、そういうやや散漫な感じになっている。記録としての難しさと限界がこのへんにあるようだ。

戦後、無数にあつたに違いない女性の自立の例

上記二冊の著者のような、ある意味で幸せな生活を送れなかった女性もたくさんいる。『ひとり生かされて―戦争孤児の歩み』（一九九五年）は、その書名が示すように、昭和二十年の東京大空襲によって両親を失い、兄と二人の孤

児になって、親類をたらい回しにされ、苦勞をしながら自分ひとりで仕事を探し、結婚し、家庭を築いた著者、中島弘子さんの記録である。特に華々しいことがあるわけではないが、戦中、戦後を生きた女性の一途な気持ち直に伝わってくる。

そして、何処の誰の骨とも分からない遺骨を家族の人数分（両親・兄弟姉妹の七人）として、兄は貰って来た。その遺骨は、千葉の本籍地にある、生後間もなく死んだ長女智恵子が眠っている小さい墓の中に一緒に納めた。が、私は毎年命日になると、両国にある戦災者慰霊堂へ行く。そこそが“戦争犠牲者の唯一の安住の場”のように思えるからである。あれから半世紀にもなるうというのに、そこへ行くと、私は何故か、今も無性に涙が溢れてくるのである。

（「焼跡」）

この記録は、おそらく戦後、日本中に、あるいは世界中に、無数にあつたに違いない女性の自立の例としてみることができる。例えば次のような場面。その時に感じた自己意識の強靱さを、率直にとりより、はつきりすぎるほどはつきりと書いてある。こういう書き方は、女性の自分史の特色でもあるけれど、やはりここは著者のきわだった個性を存分にあらわしているように思える。

年の瀬も近くなり、気忙しい一日も暮れた寒い冬の夜、家族が入り終わつた最後の風呂から上がって、ずきずき痛むあかぎれだらけの指に、そつと水絆創膏を塗っていた。ふと、ふすま越しから長女と母親の会話が洩れてきた。

「弘子姉ちゃん家の何なの？」

「女中だよ、女・中・う」

「ふうん、女中なの？」

シヨックだった。繰り返し言つた母親のいかにも蔑んだものの言い方、幼い子供たちにも浸透している蔑みの形容詞、「そうか、私は単なる女中だったのか、誰がこのまま女中生活で終わるものか」私は心の中で叫んだ。あかぎれの指が無性に痛かった。

その頃、貸し本屋から、林芙美子の『放浪記』を借りて読んでいた。芙美子の底力、その生き方、その強さに引きつけられた。すごいと思った。（略）

「そうだ、私も扶美子のように、一人で強く生きて行こう。誰にも頼らず、信じられるのは自分だけなんだ。そう思えば、誰も恨むことなく生きていけるのだ。もう身内なんか頼るのはよそう」。私は、『放浪記』に励まされて、新たな出発を考え始めた。

（「叔父の家」）

中島さんは、その後、十三歳で働き始め、偏見・差別のなかで、美容師をはじめさまざまな職業を経験、その中で自分を作り上げていく。やがて結婚、子育てもするが、義務教育も満足に受けていないことに「心のしこり」を感じ、四十代半ばになってから中学校（一）の通信教育を受け始め、続いて高校、そして大学と十数年がかりで卒業証書を手にするようになる。これがこの自分史の後半のテーマになっている。

戦中世代のこうした自分史には珍しく、この記録には、戦後、それも結婚後のこうした人生経験が詳しく、そして苦労があつたとしても、楽しそうに書かれている。中島さんのこの「うれしさ」には、孤児となつてからの苦闘の人生の敵をとつたような、あるいはほとんど無いといつてよかつた青春時代を数十年ぶりに取りもどしたような哀歓が感じられる。自分史の最後に、いくつかのエッセイと詩がのっている。そのひとつ。

わたし 戦争孤児なの

へエー

何なの その蔑みの目は

何なの その哀れみの顔は

何も分かつちやいないくせに

わたしの家族は国に殺されたのよ

だから今の平和があるのよ

冗談じゃないわ

この記録は、一種の戦争体験記録なのかもしれないが、私には、こうした逆境を生き抜く女性の心の中を素直にあらわした精神の記録として読める。いわば、テーマを超えた普遍的な人間の記録になつていと思う。百ページにも満たない自分史だが、私が感動したひとつである。なお、この本も先の若林さんの本も、前述の先輩にお借りしたものである。

VIII さまざまな自分史④ 親と子の自分史

戦争に行った世代も行かなかったひとたちも、戦後の物資不足、生活苦のなかでの結婚、子育ては同じように大変だったはずである。しかし、政治的にも激動の時代があり、そうした中で幾多の語られない想いをいだきながら、一見は平凡にみえる暮らしを続けていた、こうしたひとたちの生活の実感があとに残されることはあまりないようである。

戦争の記憶があり、戦後の厳しい生活と子供を育てる喜びがある。しかし、それを伝えるひとはいない。それは、どの家庭でも同じようで、実際、いつの時代も、子供は親の過去になどあまり関心をもたないものなのだ。

しかし、子供たちも、成長し、自分たちの老後や過ごしてきた人生を考える年代になると、はじめて親の気持ちが変わってくる。親と子のつながりというのは、いつもそんなものだ。

五十年の生涯を短歌に

二〇〇四年に亡くなった安岡正利さんの短歌集『うつしみ』が出版されたのはその翌年の二〇〇五年だった。本人はそう望みながらも生前には一冊の歌集も出すことができなかったが、夫人と三人の娘さんが記念にと発行を企画したものである。「一つ一つの歌に故人の想いが感じられて選び取ることができず、残された七冊のノートそのままを短歌集にいたしました」と「はじめに」の中で家族が書いているが、これはそのノートを見たときに私も感じた思いである。

七冊には昭和二十四年から平成十五年までの五十五年間の短歌が記録されていた。はじめの頃のノートは青インクが薄れ、かなり読みにくくなっている。安岡さんが出版するつもりで、ていねいな書き直しをしたノートには比較的最近の歌が多い。これは、確かに完成度は高いのだろうが、やや抽象的である。

仕事を離れ、短歌だけを作る中ではそうした傾向に陥るのはいたし方ないだろう。

それに対して、結婚して、子が生まれ、当時の苦しい日々の生活のなかで読んだ歌には、まぎれもない生活の実感があふれている。

この本の発行に協力して、短歌や俳句などが自分の想いや折々の心情を述べるのにふさわしい言葉の形であり、意外に簡潔にかつ劇的な効果をあげる場合があることに、あらためて驚いた。たとえ、何万語を費やしても自分の気持ち完全に表現することなどできないし、他人に伝えることもできない。しかし、短歌や俳句は、言葉が圧倒的に少ないだけに、必ずそこには何がしかの余韻が残される。この余韻を、書き手と読み手が共有することで、あたかも、伝えきれない（伝えられない）思いをも共有しているのだと感ぜられるからかもしれない。きちんとした自分史ではないけれども、こうした形の記録もあるのだと思ひ、あえて私の自分史論の中で紹介することにした。

佃煮を買はむと探るポケットに十円札が二枚しかない

艶やかにメロン白桃輝ける店頭に立ち眺めたるのみ

二カ月無事に経にけるみどり子のひたひの旋毛われに似てをり

三千円落したと思ひうまきもの食べてみたしと妻と語りぬ

いずれも、昭和二十四年から二十七年くらいの生活を詠んだ歌で、こうしたなかに

生業のペンの重さは嘆くまじ銃の重さも耐へてありしを

夜毎に狐啼く声しみじみとふるさと恋ほし涙流れき

など、生涯のテーマとなる「戦争」と「故郷・佐渡」が出てくる。これは五十五年間変わることがない。

短歌とは、こうした例にみられるように、日常の雑事の中に発見する喜怒哀楽そのものと、それに触発されて無意識に浮かび上がってくる、自分でもどうしようもない感情の噴出の二つが、そのモチーフとなっているようだ。人間というのは、半世紀以上を生きてきて、姿や表情は変わっても、その心の中は、子供の頃と変わらないのではないか。この上下二巻の中に収められた三千首余の短歌を読んで、その思いを強くする。

短歌は日々の生活を記録するのが目的ではないし、安岡さんがどうだったのかは定かでないが、特に男の作者の場合、日常生活を些末なこととして嫌う場合も多い。しかし、ひとは時代の中で生き、日々生活している身である以上、それが自分の作る短歌に反映しないわけがない。安岡さんの場合も、

食断ち手術の時の迫り来る夕への病室に心うらぶる

など、個人的な出来事のほかに、社会状況がわずかにみえてくる歌がある。

戦後長き十五年経て刺殺者がふたたび見する暗き深淵
五輪の旗翻る空蒼澄みて子のあくがれし秋晴れの午後
戦後ながき二十七年を密林にひそみ生きしか兵還るなり

浅沼稻次郎暗殺（昭和三十五年）、東京オリンピック（昭和四十年）、横井庄一さん帰国（昭和四十七年）で、年配の人には思い出の多いできごとだろう。時代が移るにつれ、

哀しみは今年新たなり旧友の去年すでにして身罷りたりと
亡き祖母の姿いまなほ見えて来る五月かなしも青若葉かげ
写真より知らざる遺父の顔おぼろわが顔を吹き秋の風行く

など、心の哀しみを詠唱する歌が多くなり、これも最後まで変わらない。また、半生を通して、故郷や祖母への愛情などは、激しいという表現をしてよいほど強い。自身の出生などにかかわることらしいが、過酷な戦争体験とともに、こうした自己表現をしなければならなかった心情と氏の生涯を、他人の私でもその歌によって少しは推測することができる。長年にわたって書かれた短歌が、ひとつの自分史にさえなっているのだ。

生前、発あらわした文章の中で安岡さんは「三人の娘の幼い頃、この子らが成長して私の歌を目にするとき、父がどのように生きてきたか理解する日もあるうかと、作歌に励んだ一時期もあった。いま、娘らは母の背丈を超えたものの、父の作品になど関心を示そうとしない」と書いている。確かにそうだった、亡くなった後にまとめあげた、この短歌集をみてはじめて、父の心の中を知った思いでいると、娘さんたちは言う。哀しいのは父だろうか子だろうか。

父母の記録を十八年かけ、小説に

自分史には、時代背景や人物構成の説明がないと、若い世代には理解しにくい内容になってしまうものがある。そうしたことで、体験や記録を素材にしなから、これを小説というフィクション形式で表現することがかなりある。この小説『始まりは秋』（二〇〇四年）もそのひとつだが、著者の佐伯啓子さんは戦後の生まれで、著者の実母の手記と家族の資料をもとに書き始め、十八年かかって書き上げたという。昭和二十年の敗戦をはさんだ昭和という時代は、ここに生きたほとんどの人々の生活を大きく変え、無数の人生ドラマを生み出した。まさにその中で生きた自らの父母の苦勞と、その人生を記録しておきたいというのが著者の強い執筆動機だった。

そのテーマに揺るぎがなかったためだろうか、叙述に緩みはなく、一気に読ませるストーリーの面白さをもっている。本人自身が書く「自分史」記録とは別な意味で、貴重な個人史ともいえる内容であり、これもあえて自分史論で紹介する理由である。なお、この本は、佐伯さんの友人から送っていたものである。

昭和十五年秋、福島県白川の商店、占部家の次女久美子に親類から見合いの話がもたらされるところから物語は始まる。相手の田之倉輝男は、当時、日本の植民国であった満州の巨大企業・満鉄で働いている。一度だけの見合いで婚約した二人は、手紙で愛を確かめ合い、二年後に結婚。久美子は海を渡り、満州での新婚生活が始まる。ここで子ども二人を出産するまでがちょうど小説の前半になる。大きな時代ドラマはないが、当時の家・家族関係や戦時下とはいえ満州では意外なほどの平穏な生活が続いていたという記録としての面白さがある。

昭和十九年、状況は一変する。戦局の悪化にともない、満州でも米軍の空襲、捕虜の虐殺、強制疎開、補充兵召集の強化など軍事色が強まり、久美子と輝男の生活も緊張の度合いを強めていく。そして、昭和二十年、ソ連軍の満州侵攻、敗戦と続く混乱の中での出産があり、昭和二十一年夏、日本内地への引き揚げが始まる。著者はこの中で、生命の危機、一家離散の危機を乗り越えた両親の行動を冷静に記述していく。この辺は案外、当事者自身の記録より、その記録

を素材にした小説の強みかも知れない。

押入の中で、久美子は声も出せず、二人の子を抱えて震えていた。たまたま前の日に、背広を売った金が手元にあつた。札入れを差し出した。札を驚掴みに取り出すと、銃を向けたまま、後ずさりし外に出ていった。いづ気が変わつて戻ってくるかもしれない。そう思うと、嚴重に戸締まりをしていても、恐ろしく、震えの止まらぬ一夜を過ごした。夜が明けて、隣の社宅が軒並み襲われ、略奪されたと分かった。組長が、八路軍にだまされ、一軒一軒案内して回ったことになる。組長は、土下座して皆に謝つた、立場が違えば、皆同じ過ちをしたに違いない。組長だけを責めるわけにはいかない。金品は奪われたが、命までは奪われなかったことが救いであつた。銃を突きつけられたあの恐怖を思えばなおのことである。この事があつてから、自警団を作り、男達が代わる代わる見回ることになった。

しかし、日本に引き揚げてもすぐに希望に満ちた生活は始まらない。実はここに、この小説の、単に戦争の記録にとどまらない、一族の歴史を描くというテーマがよくあらわれている。

輝男と久美子が出会つてから、六年が経とうとしている。婚約後訪れた、萩の季節の借楽園、好文亭。風のようにその時の記憶が、久美子の中をよぎつた。

借楽園下にある洞穴の前には、家のない人達なのだろうか、煮炊きの煙が上がり、洗濯物が干してある。何家族もの生活が見て取れた。それらを流れるように見ながら、汽車は程なく水戸駅に着いた。

昭和二十一年八月二十一日午前、降り立つた水戸駅前には、空襲にあい、復興ままならず、未だ焼け野原の様相を示していた。さっきの洞穴生活者が頭をよぎる。親父は？ 家は？ 大丈夫だろうか？

日本に帰りさえすれば、水戸に帰り着くことができれば、なんとかなる、希望に満ちた世界に歩み出せる、と想像していただけに、夢がしばむような気持ちを味わつた。胸一杯に吸い込んだ故郷の空気は、甘いだけではすまないことを示しているような気がした。

親族の複雑な関係はややわかりにくいだが、随所に出てくるエピソードは効果的に情景を浮かび上がらせる。敗戦を挟んだ六年の間に日本も家族も人情も変わってしまった。そして、この後数年たつてはじまる経済成長のなかでさらに変化は拡大していく。

家族五人で、まったく新しい生活を開始することを暗示するところで物語りは終わる。また、季節は秋だった。そこからは、次の新たな家族の歴史が生ま

れているはずだが、それは、その子供が興味をもって記録したり、小説に書いてくれるような深みをもっているだろうか。

記録に値する人生とはどういうものなのだろう。私たちが生きている時代とは何なのだろうか。さまざまなことを私は考えてしまう。

ところで、作者の佐伯さんは、「まえがき」のなかで、この小説についてこういつている。

「始まりは秋」を書くことになったのは、一九八六年（昭和六十一年）母から手記（婚約から長男誕生まで）が、私の手元に寄せられた事がきっかけでした。当初、私たち兄弟とそれにつながる孫世代に、両親の出会い結婚から満州時代の生き様を伝えたいと、記録することを目的に書き出しました。書き綴るうちに、戦争という理不尽な争いに巻き込まれた名も無き庶民が、戦中戦後をどう生きたか、そして、どのような状況においても、命の大切さを思い、どう命を紡いでいったかを書き残したいと思うようになりました。しかし、私が生まれる以前のことでもあり、母の手記や父母が私たちに語ったことの聞き覚えだけでは、その思いを充分に書き切れないと分かつてきました。そうした経緯から、小説という形をとって書くことにより、記録という目的に縛られず、自由な想像の世界で書き進めることが出来るのではないかと思いました。

ここで、話はこの小論の冒頭「自分史は文学なのか」にもどる。このふたつに境目はもちろんない。そして、記録である自分史が、フィクションである小説にごく自然に移行するのは、こういうことなのだろうと、私にはとても素直に納得できる。

IX 自分史は「究極の楽しみ」か

ここまで、私が狭い体験の範囲で入手したものの一部を概観しただけでも、自分史あるいは体験記録にもさまざまな内容やテーマがあり、記述方法があることがわかった。Ⅲ章の中で述べたように、いわゆる戦争体験記録が減少していく中で、このような大きな歴史的記述を重視しない、自分史の新しい考え方もでてきている。それは、これまでの自分史の流れで感じてきたことが事実なら、現在という時代を反映しているはずである。そしてまた、私が最初におおげさにもいったように「ひとはなぜ生きるのか」につながる、永遠のテーマへのひとつの回答にもなるはずである。

過去はなぜに美しいのか―自分史は「娯楽」である

最近の自分史をとりまく状況の中ですぐに目に付くもの、それは、自分史を一種のエンターテインメントとしてとらえる考え方である。この新しい方法論にもいくつかの波がありそうだが、私は、経済学者として高名な野口悠紀雄氏の『「超」自分史ガイド』（一九九八年、ダイヤモンド社）をその代表として取り上げることにする。

十年前といえは、自分史が一種のブームになっていて、「地域活性化」のための文化活動や「生涯学習」の一環としての自分史講座が、民間の文化サークル主催で、あるいは地方自治体主導で盛んに開かれていた時期だと記憶している。その時流に乗った感じで発行されたとも思えるので、やや軽い感じがしないでもない。この本の発行当時、ある自費出版の専門家が「まったく役に立たない珍しい本」と専門雑誌で酷評していたのを記憶している。

確かに、「ガイド」としてしているのに、大部分は、それほど目新しくもない年表だけのように見える。もうひとつは「キーワード」と称して、ある時代を思

い起こさせるための索引とでもいうべき言葉(単語)が選定されているが、これにもあまり新鮮みはない。

それでも私がこの本を取り上げるのは、この本の第一の特色が、「過去の追憶は、なぜ楽しく、面白いのだろう」という素朴な思いを出発点にして、自分史＝自分の過去を思い出す作業を「究極の楽しみ」としている点である。いふならば、自分史を書く動機を「後世に残す貴重な体験」や「書かずにいられない内なる思い」という、従来のような、ある意味でいえば深刻なところに求めているのである。「ガイド」となっているので実用的な機能を期待してしまいうから失望するので、「自分史を究極の楽しみ」とする考えだけを評価すればどうだろうか。

本書はこのような「ノスタルジアの世界への時間旅行」へのいざないだ。始めてみると、寝るのを忘れるほど面白いことがわかるだろう。あまりに面白いので、はまり込み過ぎないように、あらかじめご注意ください。平日にやると、夜更かしして翌日の仕事に差し支えるかもしれない。だから、週末に始めることをお勧めする。

「過去への時間旅行」は、これまで「自分史」といわれてきたものである。自分史の作成は、誰もができる究極の楽しみだ。金もかからない。準備も訓練もいらない。(本書以外には)特別の道具も必要ない。身体が動かなくなってもできる。

退職期の人々は、これまでの人生を振り返り、自分と日本の歴史を総括してみたらどうだろう。いま退職期を迎えようとする人々は、高度成長という日本社会の大きな変化を自らの歴史として体験した人々だ。だから、自分史の作成は、「日本の時代」の総括を行なうことにもなる。退職後の生きがいとしては、最高のものだろう。(「はじめに」)

ご覧のように、テレビの通販番組も驚くような効用が並んでいる。要するに、この本は「自分史マニユアル」という体裁をとっているけれども、完全に新しい知的なエンターテイメント(娯楽)を勧めている本であるということになる。また、文中で野口氏は「かならずしも書く必要はない」といつているように、実は「書かせるためのノウハウ本」でもないのである。野口氏は、これを正當な、自己記録としての従来型の自分史と同じとは考えていないと思うし、「超」をつけたのはそのためだと考えられるが、次のような記述をみると、もしかしたら、自分史の発展系と考えていたのかもしれない。

「超」自分史の作成は、頭の中で人生をもう一度やり直すことである。サイコセラピーでよく行なわれる手法は、悩みの潜在的原因を探り、それをとり除くというものだ。これを自分で行なうのが、自分史の積極的な活用法である。ある種の自己カウンセリングを行なうことだといってもよい。この点で、自分史の作成は、自己発見への旅だということもできる（「本書の使い方」）

この本で野口氏が提案したこういう考え方は、十年経った現在でも、自分史の置かれている文化状況のひとつをあらわしているだろうか。その前に、自分の過去を楽しむという、こうした考え方が多くの人に理解されるのだろうか。問題はそこにある。

一九四〇年生まれの著者である野口氏は、知られている限りでは、日比谷高校、東京大学、大蔵省、一ツ橋大学教授、東大教授という絵に描いたような超エリートコースを歩み、その間に経済学者としての地位を固め、一方で『超 整理法』はじめていくつものベストセラーを一般書として出すという、実に堂々たる人生を送っている。

もちろん他人の人生の労苦などわかるはずもないし、エリートにはエリートなりの悲哀や苦痛があるには違いないだろう。しかし、ごく常識的にいって、それほど貧しくない家に生まれ、多少の苦労はあったとはいえ、このように順調で、挫折や大きな失敗をしたこともなさそうに思える野口氏が、六十歳を目前にひかえる年齢になって、自らの過去を振り返ったとき、そこにあるのが「郷愁に満ちた懐かしい思い出ばかり」であつても不思議ではない。私はこの本の「前書き」にある「過去の追憶は、なぜ楽しく面白いのだろうか」という著者の言葉は、おそらく実感であり、嘘はないと思う。

ここからは推測だが、おそらくこれから自分史を書くようになる年齢のひとたちの多くは野口氏の世代になる。この世代の人たちにとつては、個人差はあるにしても、過去の人生が「楽しく、面白い」と感じられるような感覚自体が理解できないことはないだろう。この世代には一時代前の人たちにあつた「戦争・戦時体験」がない。厳しい戦後の時代も、子供だったから苦労を感じるほどではないひとが大多数だろう。とすれば、このような「自分史はノスタルジアの世界への時間旅行である」とする考え方を、だれも一概には否定はできなくなる。

良くも悪くも自分史を書く動機が、社会的意義を求める方法から、一種の「楽

しみ」あるいは「生きがい」というような、個人的側面に比重が移っていくことを、私は否定しない。

インターネットで簡単に自分の記録を公開できる時代になった。個人が文章を書いて発表すること自体が社会的意義を持つていた時代が終わったといってもいい。この『「超」自分史ガイド』は、時代を超えた書籍にはならないかもしれないが、こうした時代を反映した、ひとつの事象の先駆け、あるいは宣言としての意味はもっていると思う。

ただし、残念ながら、野口氏の提案したこの試みが現実には広く浸透したとはいえないようだ。実際には、この十年間で、自分史に対する社会の関心はかなり薄れてきている。自分史講座のような地方自治体の活動は減少し、新たに発行される自分史の数も増えてはいないようである。

野口氏が「必ずしも記録を書く必要はない」といつているのだから当然かもしれないが、実際のところ、多くの戦後世代は、「過去への時間旅行」どころか、まだ現在の生活を十分に楽しんでいて、自分の人生を回想する時期にさえなっていないのだと思う。

この小論のⅢ章で、私は「かけがえのない過ぎ去った日への思いがなくては自分史にはならない」「自分史は自分の見てきた大きな夢を描くことだ」と書いた。Ⅱ章で紹介した『妻恋記』の著者の美澤雅夫さんは「自分史だけが人生を遣り返すことができる」といい、『超 自分史』の著者、野口氏は「自分史はノスタルジアの世界への時間旅行なのだ」といつている。

いずれも、私は認める。しかし、同時に述べてきたように、自分の人生に対する、どうしても書き残したいという熱い思いと、強い意志がなければ、本当の、ひとを感動させる自分史を完成させることはできない。つまり、記録を書くための強い動機がなければならぬ。それは、内容が芸術であれ、歴史的記録であれ、変わることはない。これも認めなければならぬ。そして、どのような接近方法をとっても、自分史は、過去の自分と歴史との関係を考えることだから、知的な努力と集中力を伴う作業なので、それなりの動機がなければ取り掛かれるものではない。つまり、野口氏のような「究極のエンターテイメント」には単純にならないと考えたほうがいい。

「過去への郷愁」が十分にその「強い動機」になりうることは、この自分史論の中でみてきた通りである。また、過去を語ることが「楽しみ」であっていけないことはない。もちろん、同じ戦後世代でも、そう感じるひとばかりではない。私は、それらを含めて、この複雑な現代社会を生きてきた多くの世代の中から、やがて驚くような自分史が誕生することを期待している。その可能性の一端を次章で語りたい。

X 自分史の行方—新しい「闘いと再生」の記録

「魂の叫びとしての体験記録」から「美しい過去への時間旅行」まで、自分史に対するさまざまな考え方があつた。自分史文学のように、自己へのより抽象的な接近の仕方もある。ここでは、最後に、自分史には、現代ならではの、新たな闘いと再生の記録もあることを述べてみたい。多様な展開の可能性をもっている自分史のなかで、本来の力を発揮できるひとつのテーマでないかと思うためである。ここでも、私が直接、製作をお手伝いした作品を事例にする。

その代表ともいえるのが「闘病記」である。この現代における新しい“戦記”においては、闘う相手は敵ではなく自分であり、病気であり、肉体と頭脳の衰えであり、最後に、避けられない運命と死である。闘いに勝って生還するひともいる。闘いに破れ、帰らぬ人もいる。生還しながら再発への恐怖をかかえるひとも多い。どれもが経験者しか知りえない真実を語っている。どれだけ時代がたつても、人間は死と肉体の苦しみからは逃げられないからである。

闘いは病気や傷害ばかりではない。結婚、離婚、家族、仕事、生活——そのすべてに、一歩間違えば深い闇が待ちかまえている。人知れぬ孤独が、この巨大で安全な社会のなかに不安や悩みをもたらしている。これらすべてが自分史の新しいテーマになりうるものである。

闘病記の中で、もっとも多いのは「ガンとの闘い」らしい。しかし、最後まで自分や自分の周囲の状況を冷静に見極めることのできるガン患者には、それなりの苦しみがある。女性の場合、幼児の場合、壮年男性の場合—患者の置かれたさまざまな社会的状況のなかで、それは単なる闘病記を超えた人間記録になることがあるようだ。

闘病記―乳ガン手術、再発の不安そして人生の岐路の中で

『限りある日々を生きる』（二〇〇二年）の著者、板橋栄子さんは一九八八年に乳ガンの宣告を受けた。手術後の生活に悩み、当時はまだあまり知られていなかった乳房温存手術を知り、病院を変え、手術は成功したが、その後の壮絶なりハビリ、激痛、身体のだまざまな異常と戦いを続けながら、離婚を決意し、厳しい生活のなかで育児と仕事をつづける。そして十数年後の乳ガンの再発。その不安の中で闘病記を中心とした自分史を書くことを決意する。当初は雑誌「月刊ナーシング」に連載され、その後、この一冊として出版された。以下はその第一章「十一年目の再発」から。

苦しいことつらいことから逃げ出そうとあがいたり、目を背けたりするよりは、とことん悩んだほうがより良い結果を生むのでは：長い人生、そんな思い込みを続けてきた。現実そうなることが多かったし、今回もまた然りである。

だが、がんが再発した今、呑気に憂れている場合ではなかった。私には最後にやりたいことがあった。

早期発見の乳がん、その頃まだあまり知られていなかった乳房を切り取らない手術、その喜びも束の間、末梢神経損傷による疼痛、その対処療法としてのモルヒネや向精神剤の常用、四度の交感神経節ブロック、脊髄硬膜外腔への神経刺激装置の植え込み手術。そしてがんの再発と、体験したさまざまの治療法や医師たちへの畏敬とそして不信――。自分の胸に仕舞い込んでおくには重すぎる経験だった。大きな声で叫びたい、すべて吐き出して頭の中をからっぽにしたい。しかし私に何が出来るようか。

そんな私の心を見抜いたように、みややさんが言った
「闘病記を書きなさい、貴方にはそれが一番ですよ。原稿は少しずつでもいいから。あとは私に任せて……」

多忙な彼女にまた用事が増える。心苦しかったが、このプレゼントを頂くことにした。季節はもう梅雨に入ろうとしていた。

まことにシンの強い女性だと思う。先にも述べたように、女性の書いた記録は生活の細部までの細かい描写がなされていて感心することが多い。このことを、あらためて感じる。彼女が叫びたかった思いは、がんと闘いだけではなかった。離婚、友人とのいさかい、店の資金難。まるで連鎖反応のようにさまざまなことが起こる。それでも、生きる努力をやめなければ、季節が移り変わるように何かが変わっていく。

やつと落ち着いた頃は、もう秋も深く、大学通りの銀杏並木もすっかり色づいていた。落ち葉を踏んで歩きながら、去年と同じはずなのにあまりの鮮やかさに驚いた。それは暮れになって点灯された、ツリーのイルミネーションも同じで、見るもの全てが新鮮だった。モルヒネを減らした分、感じる痛みは同じなのに、この心の軽さは何だろう。

この数年、外出は美容院や買い物だけだった。それなのに、歩きながらふと目にとまるギャラリィや花屋を覗いたり、見知った店主と立ち話をするようになった自分に驚いた。

『麻薬が減らせた。もしかしたらいつかゼロになり、電極もはずせる日が来るかもしれない』

人間にとつて、希望が持てるということが、いかに大切かということを目にしみて感じた。

闘病記は戦争記録に似ているといったが、あくまでそれは記録の大きなテーマになんらかの共通性があるというだけで、むしろ、まったく別のものである。一番大きな違いは、ガンとの戦いに限らず、自分との闘いである。闘病記には終わりがないことだ。いうならば八月十五日がないのだ。敵はいつまた襲ってくるのか分からない。ごく平穏な生活の裏に潜んでいる不安。しかし、これに耐えながら人生を生きていくことが、逆に人間を自覚させ、時に天使のように変貌させることがあるのをわれわれは、闘病記から学ぶことができると思う。

闘病記 病床の幻覚を小説に結晶化

潜在的な患者がもつとも多く、重篤な後遺症の残る患者もたくさんいるのが脳疾患や循環器系病だそうだが、その闘病記録が少ないのは、末期まで意識がはっきりしているガン患者に比べて、脳や手足の機能損傷のために記録自体が書けなくなるためだといわれている。

若い頃から文学サークルに属して作品を発表していた佐味吾郎さん（ペンネーム）は、定年間に生命の危機にもつながる深刻なこうした病に襲われる。そして、苦しいリハビリを経て数年後に書き上げたのが長編小説『拒む森』（二〇〇四年）だった。主人公が病気で倒れ、その治療中の病床での自らのさまざまな夢の世界がその中心になっている。

サラリーマン生活の終わりに近いある朝、運命のノックを受けたように、突然大病にかかった。幸い、命は助かったが、無理のできない体になった。退院時に医師から、重いものなどを持ち上げないようにとの、厳重な日常の注意を受けた。当時の精神状況は、薄暮の中をさま迷う気持ちだったが、健康を取り戻すために、歩くことから始めた。最初は身体がふらつき、百歩も歩くと息が切れた。散歩のたびに、それまでの生き方について反省することが多かった。どう生きるか。ともかく、助けられた命を大切にして生きたい。それが作品を書くきっかけとなった。

（「あとがき」）

もちろん物語はフィクションだろうが、自分自身の直前の体験を核にして、これまで悩み抜いてきた文学上の表現の壁を破るための契機にしたかったのだということ、佐味さんはこう述べている。病気との闘いのなかで、自分の人生の過去につながるいくつかの体験をしたことが、新しい小説に向かわせる力になり、それがまた生きる力にもなっていたのかもしれない。おなじく「あとがき」から。

入院当時は、生死の境にあり、幻覚に襲われ夢に追われる毎日だった。入院十日目頃から、幻覚や夢の場面を、臆気ながら思い出すことができるようになり、その糸を手繰っていくのが、ベッドでの日課となった。幻覚は凶暴で、夢はつかみ所がなかったが、どちらも生命の根幹に複雑に繋がりを、過去という深い闇に大きな根を持っているように思えた。

作品と事実の関係は、凧と風の関係に似ている。風の強さで、凧の大きさが決まるが、それを上げるのが糸を手繰る人である。引く糸の強弱とタイミングが大切である。風の強さとは魂へのインパクトであろう。糸の操りは想像力の働きに似ている。初めての長編であるので、その調整をはかるのに、意外なほど時間がかかったが、その期間が一番楽しいときであった。

この長編を出版してからすぐ、佐味さんは二度目の発作に見舞われ、帰らぬひとになった。まるでこの小説を書き、自らの体験を伝えるために、大病から生還したかのようである。

リストラそして自然への接近

一九九〇年代は、日本の企業社会、ことに中小企業の多くが、厳しい経営環境のなかで倒産し、あるいは「リストラ」の名の下に従業員の解雇を行った。しかし、数十年も働き続けてきた多くの現場作業員にとって、五十歳代での解

雇、失業はあまりにきびしい運命だといえるだろう。ここに多くの悲劇が生まれ、自殺する中高年も増加する。まるで、戦争で見捨てられ餓死した旧日本軍の下級兵士と共通する怒りを感じたひとも多いだろう。角田武敏さんも、そうした一人だったに違いない。二〇〇二年に出版した『山の音 山の悲鳴—そして自然の恵み』のなかで、本人と思しき主人公・古井武造はつづやく。

噂は本当であり、しかも会社の対応は実に早かった。二月末日で古井武造もリストラされることになっていった。

世間を吹き捲くっているリストラの嵐が、正か自分にまで来ようとは一度たりとも考えたことがなかっただけに、五十五歳にして初めて味わう苦渋そのものである。

決まってからの二月未までの一ヶ月半、その日々の早く過ぎてゆくこと、これも又初めての経験だ。まだ十年くらいは働ける自信があっただけに、そのショックが大きく、どう過していけばいいのやら、全く見当がつかない。

(略)

今迄の五十五年間はなんだったんだ、気持ちだけがどんどん滅入ってしまいいどうにもならない。古井武造しつかりせい、心の中で呟くが力が入らない。妻は焦らないで、と人事のように言う。そう感じてしまう古井武造である。俺の身にもなってみろ、妻の一言一言がどうしても気になってしまふ。三十数年にして初めて妻とのトラブルが続く。何とかしなくてはと、気持ちだけが先走る。

結局のところ、正規の職探しはあきらめざるをえず、アルバイトや不安定な仕事で過ごすようになる。まして、数年たてば、通常の職場でも定年という名の退職が行われることはわかっていた。仕事以外に俺は何をするんだ。古井武造はこんなことも考えはじめ、茫々たる人生の先行きに思いをめぐらす。

自分の不甲斐無さに落ち込んでしまふ。これが自分の弱さだと思いつつも、それをどうすることも出来ない。リストラを受けてからの月日の過ぎてゆくのも、又実に早く感じられるようになり、定年後の人生なるものが、他人事のようにまだまだ先の事と思っていたのが、今はそれに直面し、残りの人生の方がグーンと少なくなかったことに、ただただ戸惑うのみで、人生の博さを感じる古井武造である。俺の人生はリストラを受けるまでが、生き甲斐のある人生だったのか。活き活きとした日々を過していたようにも感じなかったが、あの頃までが俺の花だったのかなあ。愚痴っぽい感傷に浸る日が多くなってきた。

しかし、そうした中で古井武造は、はるか昔の趣味だった山歩きを思い出し、ある日、退屈のぎにでかけ、その魅力にひかれる。そして、山歩きの中での自然の美しさと大切さ、さらにそれを壊している人間の勝手な振る舞いに怒りを覚え、いつしかそれを追求することが自分の生き甲斐になっていることに気づく。

リストラされて五年、六年と過ぎ、還暦も過ぎ、リストラされた頃の空しい気持も、自然と関わるようになってから、遠い昔に起きた出来事のようにも思われ、生き甲斐のある人生とは、こんなことを言っているのだから、自分の人生がだんだん楽しい方向へ向っているように思えて、内心ホツとした気持である。

森林を歩き、山を登り自然の素晴らしさを実感し、環境破壊の空しさを知ってもらいたい。古井武造は定年後の人生を考えている人に、楽しい人生を過してもらおう為にもぜひ、山歩きを勧めたい。

角田さんの記録は決して筋密だつて書かれてはいるわけではないが、自分の休業体験のやるせない気持ちで過ごした年月が、山の自然、そして、地球環境全体の保護、育成、最後は子供たちへの愛情へと結びついていく様子がよくわかる。リストラ、失業、サラリーマン定年という人生の大きな転機を、たつたひとりで闘った人間の物語のひとつであり、現代には、こういう記録もあるのだと思う。

色川大吉氏は戦後一九六〇年代に知り合った「ふだん記」運動の中で、地元的生活者が書いた珠玉のような文章（これが後年になり自分史と名付けられる）のことを繰り返し語っている。あれから四十年以上たっているが、同じように、新しい道を歩み続けている生活者の典型をこの記録にみるができると思う。角田さんはその後、埼玉県から山梨県の山村に移住して充実した日々を送っているらしい。

体験的自分史論 (WEB版)

二〇一〇年七月二十五日 発行

著者 筑井信明

発行 本の風景社

〒351-0035

埼玉県朝霞市朝志ヶ丘三二五二一〇八

<http://www.longview.jp/>
